

## 第四章 由利本荘市域の獅子舞番楽

### 第一節 坂之下番楽

#### (一) 所在地

坂之下番楽(さかのしたばんがく)・・秋田県由利本荘市矢島町坂之下

#### (二) 上演時期・場所

坂之下番楽の上演時期は、かつては幕開きを旧暦一月五日に行い、春と秋の神社の例祭に舞い、旧暦十二月五日に幕納めをしていた。現在は、一月に幕開きをし、四月の熊野神社春祭り、八月十三・十四日に小路渡り、同じく八月十四日に熊野神社例祭で奉納獅子を行い、その晩に坂之下公民館前に舞台を設営し、後番楽を行っている。幕納めは十二月頃に行っている。

#### (三) 当該地域の概要(地勢・人口・戸数・生業・歴史的文化的特性など)

坂之下は鳥海山北麓に位置し、現在は由利本荘市に属するが、旧矢島町の東部に当たり、集落の南側には子吉川が流れ、東側には標高七一三mの八塩山を擁する山地や丘陵が聳えている。

坂之下は、中世末期、由利十二頭の一党、大井氏が仁賀保氏と抗争を繰り返し、最後は西馬音内城で自刃した豪傑・大井五郎満安が居城を構えたゆかりの地として知られている。

坂之下の地名は慶長十七年(一六一二)の『由利郡中慶長年中比見出檢地帳』に坂下村とあり、近世初期には集落は形成されていたことがわかる。宝暦六年(一七五六)の『御領分中覚書』には本田三八九石八斗一升二合、新

田三九石五升で、家数五五軒、人数二六三人とあるが、この数字は平ヶ森村を含んでいるものと思われる。

『羽後国由利郡村誌』には、明治元年(一八六八)の戸数は六〇軒、人数三一九人、馬八八頭で、馬のほか鶏卵一五〇〇粒、炭一〇〇〇貫、薪六〇張、繭六石を矢島町に、杉材二万才を本荘町へ出していたことが記録されている。明治初年かつての生業は林業が盛んだったが、現在は兼業農業が多い。坂之下集落の現在の戸数は五九戸(平成二十七年国勢調査による)。

#### (四) 歴史・由来

坂之下番楽は、獅子舞番楽を伝えた本海坊から晩年に伝授を受けたとされ、本海坊が高齢で腰が曲がっていたため、腰をかがめて舞う所作が伝えられたという伝承が残されている。近世には「御用獅子」として盆に八森陣屋の広間に参上して領主の前で数番を演じたとも言われている。しかし、由緒を記した記録類は、大正五年(一九一六)の火災により失われ、近世の記録はほとんどわからない。

実際の史料における坂之下番楽の初出は、由利本荘市矢島町城内八森に鎮座する金毘羅神社の祭礼記録『金毘羅日記』のものである。金毘羅神社は、讃岐高松藩十七万三千石を治めた生駒高俊が、お家騒動により寛永十七年(二六四〇)に改易されて矢島の地に転封された際、金毘羅大権現の分霊をこの地に祭つたもので、近世は五月十日と十月十日に生駒家臣四名が世話方となつて祭を執行していた。『金毘羅日記』には文化十三年(一八一六)からの祭礼記録が残されている。金毘羅神社は領主である生駒家の崇敬が厚く、祭礼は盛大に行われた。祭りの時には境内に相撲、狂言(芝居)などが呼ばれて興行が行われたこともあったが、毎年のように領内の獅子舞による奉納が行なわれた。記録の最初の年に当たる文化十三年には新所の獅子舞の奉納があったが、その後は荒沢の獅子舞の名が多く見られるように奉納の

中心が荒沢獅子舞となるが、嘉永五年（一八五二）は五月と十月ともに「坂之下獅子舞」とあり、これが坂之下番楽の名が記された近世の唯一の記録となっている。

また、生駒親正と近世最後の領主・親敬を祭り、八森陣屋跡に建てられた矢島神社の祭礼では、かつては生駒家に仕えた士族が集い、毎年五月十三日に例祭が執行され、荒沢獅子舞が毎年奉納を行っていたが、ここでも昭和十五年・十六年に坂之下の名が確認できる。矢島神社の祭礼における獅子舞は戦中に一度中止された後、昭和二十三年に復活するが、昭和三十三年の坂之下番楽の奉納以降再び中断する。昭和四十五年に坂之下番楽が秋田県指定無形民俗文化財の指定を受けたことを記念して神社で奉納公演を行っているが、それ以降は同神社での奉納は行われていない。

このように、坂之下番楽は、昭和十年頃に荒沢獅子舞が退転した後、荒沢獅子舞が行っていた神社祭礼での奉納を引き継いだだけでなく、毎年五月二日に行われる矢島招魂社の祭礼にも昭和四十一年から奉仕を行ったり、神明社八朔祭にも築館神楽に替わり、平成二年（一九九〇）から平成九年まで奉納を行っている。

坂之下番楽は、昭和四十五年（一九七〇）に秋田県無形民俗文化財の指定を受け、現在は地元の八月十四日の熊野神社での奉納、公民館前に設けた特設舞台での後番楽をはじめ、前述の矢島招魂社例祭での奉納や県内外の民俗芸能との共演などで積極的に上演を行っている。また、山形県最上郡金山町の稲沢番楽は、坂之下番楽から伝えられたという伝承を持ち、平成五年に坂之下を訪れて交流をし、新たに坂之下から三番叟を習っている。近年では、地元の矢島高校で地域学の授業として高校生が坂之下番楽の指導を受けて、毎年空白からみに取り組んでいる。

近世に矢島修験が関わったとされる獅子舞番楽は、「修験が置かれている村では、古くは修験が獅子を管掌して祈祷を行うのが通常の方法ではなかつ

たかと思う。（中略）ただし修験といえどもこの地域では村の別当であり村人の一員である。「神宮獅子」や家々回りの獅子舞には別当と村人が一体になって獅子舞を執行してきたことと推察される」<sup>1)</sup>と述べられているように、修験者が一山を組織し、修験集落を形成した他の鳥海山修験と異なり、矢島修験は一山組織を形成せず、修験者が集落の一員として地域に入っていた。そこで、坂之下の修験者について考えてみたい。

神田より子氏によれば、矢島修験は鳥海山北麓の登山口を支配し、貞享年間以降に当山派醍醐寺三宝院末となったとされる。矢島修験の学頭は矢島十八坊を擁した福王寺で、矢島修験は春秋二度の入峰があり、春に四十日、秋に三十日の籠もりの修行をし、触頭元弘寺から坊号院号を得ていた。また、蔵岡や小滝などが一地域に居住し修験集落を形成したのに対し、矢島修験は広範囲に分散して居住し、年中行事や修行の折に行動を共にした。

坂之下には矢島十八坊のひとつ重学院があった。重学院の文書史料は現在矢島町資料館が所蔵しているが、その中には年代未詳の獅子舞の由緒を記した巻物の写しと思われる文書が一点あるのみで、番楽と直接の関係性を示す文書はない。

重学院は矢島十八坊の一坊として、元禄三年（一六九〇）に達故隆事が開山し、馬頭観音を本尊とする観音堂や祈願所を設け加持祈禱を行ったり、八森陣屋の厩祭を取りしきっていた。重学院の子孫である木村掬郎氏によれば、<sup>2)</sup>明治の神仏分離後、重学院は新義真言宗に属したが、その後も崇敬を集め、昭和五十年まで存続し、初代達故隆事から九代の住職が続いた。重学院は厩祓いと称する読経と配札を行っており、冬は旧矢島領内を、夏には生駒家の分家である伊勢居地生駒家の仁賀保方面の旧領の家々を廻っていた。これは昭和初期まで続いたという。このように重学院は厩祓いという独自の廻村行事を行っており、そこには番楽の家々廻りとの接点は認められず、坂之下には修験者の寺院・重学院があったものの坂之下番楽とは別に活動して

いたものと考えられる。

ところで、坂之下番楽には、坂之下の獅子が生駒家の御用獅子として生駒家の庇護を受け、正月やお盆に生駒公の御前に参上して番楽を披露したという話が伝えられている。この御用獅子について、本田安次氏が『山伏神楽・番楽』の中で次のように記している<sup>3)</sup>。

知られている限りでは、右の生駒氏の御殿に参向して奉仕した御用獅子というのが三頭あつた。即ち御用頭と名づけられたのが荒沢の獅子、二の獅子が興屋のもの、三の獅子が二階のものであつた。これら三頭の獅子は、維新前迄、毎年盆の十四日に殿中に上がった。

これによれば、御用頭が荒沢、二の獅子が興屋、三の獅子が二階とされている。この三つの講中の内、興屋と二階は現在でも活動を行っているが、前述のように、荒沢の獅子舞は昭和十年頃に退転している。この荒沢は本海行人終焉の地とされ、荒沢番楽は近世から明治、大正に掛けて活発に活動した番楽で、前述のように矢島周辺の神社の祭礼などにも招かれ、獅子舞を奉納した記録が多く残されている。矢島神社では、明治二十七年（一八九四）から昭和十一年（一九三六）まで荒沢番楽が出仕した記録が残されており、荒沢番楽と生駒家との関係の深さを物語っている。さらに「御用獅子」という言葉に注目すると、荒沢の佐藤家が所蔵する明治二年（一八六九）の「奏祭本海流系譜」の掛軸に、次のような記事がある。

全矢島領内獅子舞大祖也、よつて五穀成就出日和祭トシテ鳥海山学頭に御祈祷ありて同所へ相結び番楽相勤め、御堺小坂戸川まで参り候はば己巳に御用獅子と被 仰せ付けられ候

荒沢獅子舞が戊辰戦争の戦勝祈願をし、見事勝利をおさめたため、己巳の年（明治二年）に生駒親敬が荒沢の獅子を生駒家の御用獅子とした。ここに「御用獅子」という言葉が用いられている例を確認することができる。

また、生駒家の記録から近世の獅子舞の記事を見ていくと、生駒家の御納

戸役の記した日記（『御納戸日記・御用部屋日記抄』、矢島町教育委員会、一巻から十巻まで刊行）には、獅子舞に関する記事が六件記されている。

①安永九年（一七八〇）九月二日  
一 笹子常学院、兼て願いに付き、宮獅子召し連れ罷り上り御祈祷申し上げ御礼差上る<sup>4)</sup>。

②安永九年（一七八〇）十月十日（親睦）

一 金比羅御祭礼に付き、御額御奉納遊ばされ候。並に猿倉獅子舞仰せ付けられ候。金比羅へ四つ時入らせられ御酒御吸物出る<sup>5)</sup>。

③安永十年（一七八一）二月三日（親睦）

一 初午御祭礼に付き、中直根村獅子舞仰せ付けられ候<sup>6)</sup>。

④安永十年（一七八一）四月十日（親睦）

一 笹子常学院、兼て願いに付き、宮獅子召し連れ罷り上り御祈祷申し上げ御礼差上る<sup>7)</sup>。

⑤寛政八（一七九六）年五月十日（親章）

一 例年の通り金毘羅御祭礼、福王寺、社人、神子相詰め候。川内郷二階村より獅子舞参る<sup>8)</sup>。

⑥文化六年（一八〇九）八月朔日（親章）

一 殿様御城着御延日に相成り、両社祭礼延ばされ、狂言角力も相止め候に付き、獅子舞仰せ付けられ候<sup>9)</sup>。

①④は笹子の常学院に関するもので、安永九年に生駒親睦が入府の途中で病となり、笹子の常学院が祈禱を行って快癒したため、常学院は親睦より波引車（半車）の生駒家紋を頂戴したと言われている。また、常学院は領内の獅子舞巡行を許されたとされ、その後も①④の記事のように八森陣屋に参上して祈禱の獅子舞を行っている。これについては天明七年（一七八七）の榊家文書「常学院由緒之事」<sup>10)</sup>（『鳥海町史資料編』、一九八七年）にも次のようにある。

一 御紋付御獅子所持罷在、且又御領分中御獅子廻シ御免被 仰付候事。

一 御前御上下之節、薬師尊之下へ出張仕、机二右御獅子上ケ、両脇へ御紋所の高張二面御目見恐悦奉申上候事

また、領主の参勤の御上り御下りの節にも常学院が笹子の倉手薬師尊で道中の安全を祈禱することになっていたと言われている。常学院は明治の神仏分離により秋葉神社となったが、現在も獅子頭が残されており、獅子頭の額には半車紋が描かれ、獅子の上顎の奥には生駒監物の銘が残されている。

この①④の常学院の二件の記事は修験による獅子の祈禱のものである。残り②③⑤⑥は矢島金毘羅神社の祭礼に村の獅子舞が出仕した記事である。なお、②③⑤から、猿倉、中直根、二階の獅子が金毘羅神社の祭礼に出仕したことが生駒家の資料からわかる。なお、⑥も金毘羅神社祭礼のものであるが、どの獅子舞が出仕したものかはわからない。また、前述のように、金毘羅神社の祭典記録『金毘羅日記』から嘉永五年（一八五二）が五月・十月ともに坂之下の出仕、安政六年（一八五九）五月は興屋の名が確認できる以外、文政七年（一八二四）以降はほとんどが荒沢獅子舞の出仕によるものであった。このように、生駒家の御用獅子という伝承を持つ荒沢、興屋、二階と、独自の御用獅子の伝承を持つ坂之下はすべて近世の矢島金毘羅神社に奉納を行った獅子舞であることがわかる。

次に本田氏の話や坂之下の伝承にある「維新前迄、毎年盆の十四日に殿中へ上がった」という記述について考えておきたい。これまで見てきたように生駒家は初代高俊の時代に、一万石の領地を分割して相続させたため、生駒本家は八〇〇〇石の交代寄合（三〇〇〇石以上の非役の旗本で参勤交代の義務を負う）となった。しかし、生駒家は他家騒動で改易になった家のため、参勤交代は許されず、江戸詰めとなっている。ようやく八代親睦の時代に参勤交代が許されることになる。親睦が安永九年（一七八〇）に参勤交代を始め、その後、一二代親道まで一五回の参勤交代を行っている。このように、生駒高俊が矢島領の当主になってから、八代親睦が参勤交代により初入府す

るまでの約百二〇年間、生駒当主が矢島の領地を訪れたことはなく、親睦の代以降の記録を見ても、八森陣屋で獅子舞を披露した記録は、常学院の祈禱の獅子以外に確認することができない。

一方、生駒家の庇護を受けた矢島金毘羅宮の春と秋の二度の祭礼では、荒沢、中直根、二階、興屋、坂之下など多くの獅子舞が出仕している。この金毘羅宮での奉納が、明治以降、本田が採録する昭和五年（一九三〇）までの間に生駒家の御用獅子という言葉へと変わったものだと考えられる。これには前述の明治五年の荒沢の掛軸に見られるように、幕末、明治以降の荒沢音楽と生駒家との結びつきが大きく関与していたものと思われる。

最後に、坂之下の伝承について一言述べておく。坂之下音楽は荒沢から習ったものとされ、荒沢音楽退転以降、地元祭礼への出仕など荒沢音楽が担っていた役割を引き継いできた。このように、生駒家との関係が深かった荒沢音楽の跡を継いだ坂之下音楽の誇りが、生駒家の御用獅子という伝承などに表われているものと考えられる。

(五) 現状と過去の状況

(1) 舞台 (図1)

坂之下公民館前に幕を張り、莫産を敷いた特設舞台を設営し、そこで八月十四日の後音楽を行っている。後音楽の観客は主に坂之下集落の住民で、お盆の時期に当たするため、多くの人で賑わう。

(2) 行事次第

A 熊野神社奉納獅子

熊野神社での奉納獅子は春祭りとは八月十四

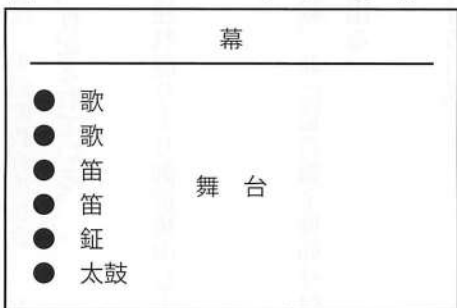


図1 舞台図



日の例祭の時に行われる。平成二十七年八月十四日の調査では、午後六時に神職、氏子、番楽講中が神社の拝殿に参集し、祓詞、修祓、祝詞奏上、玉串奉奠など神式による祭祀を行う。祭祀が終了すると祓獅子となり、この日は午後六時五十分頃に終了となった。

B 小路渡り

本海番楽では、お囃子を奏しながら行列することを「小路渡り」というが、坂之下や濁川では集落の家々を獅子が廻る家々廻りのことを「小路渡り」と呼ぶ。本海流獅子舞番楽では「盆獅子」と呼んでいる。坂之下番楽では、以前は神楽衆の家だけを廻っていたが、平成二十五年頃から坂之下全戸に拡大し、これを一晩で全五七戸を廻った。その後、平成二十八年から上の集落を八月十三日午後七時から廻り、下の集落を翌十四日午前七時から廻るとい形式に改められた。

次に、小路渡りの実際を見ることにする。十三日午後七時に坂之下番楽伝承館前を出発し、まずは伝承館に隣接する番楽の師匠・茂木幸一郎氏宅から順に上の集落を廻る。番楽一行は目指す家が近づいたら小路渡りのお囃子を奏して一行の到着を知らせる。家主の案内で床の間に案内され、神棚や仏壇前で祓い獅子を舞う。廻る軒数が多いため、直会はほとんど行われず、家主と挨拶を交わして外に出て、もう一度お囃子を奏して一軒の家が終了となる。一軒あたりの所要時間は十五分程度となる。小路渡りで必ずしも家にかかるわけではなく、玄関先で舞うこともある。この時は手舞は行わず、獅子の四方固めを略式で舞う。この場合の所要時間は三分程度となる。家の中で舞う場合、獅子舞は手舞と祓い獅子で構成される。祓い獅子は、まず最初に神棚向かって祓



写真1 小路渡り

い、次に家長、家族の順で祓ってゆく(写真1)。小路渡りでは、神棚や仏壇の前で祓い獅子を舞うが、坂之下では祓い獅子は本来は神棚に向かつて祓うものだとされている。これに対して、本海流獅子舞番楽の盆獅子とは、盆獅子は仏壇に向かつて舞うものだと考えられている。

また、屋敷神を祭っている家では、家の外に祭られている屋敷神の祠の前で略式の祓い獅子を舞う。また、生まれ子(宮参りを済ませていない子供)がいる家には上がらず、玄関先で祓う。これは坂之下の獅子が荒獅子で、祓うと子供の気性が荒くなるためだと言う。新盆の家にも上がらず、玄関先で舞う。

小路渡りでは、集落内の各戸を祓うだけでなく、集落の境で外に向かつて道切を行い、集落の外から悪いモノが侵入しないように祓う。これは玄関先や屋敷神の祠の前と同様に略式の祓い獅子を舞う。道切りは坂之下集落の境に当たる六カ所で行われる(写真2)。また、子吉川に掛かる坂之下橋を渡る際には「橋渡り」という独特なお囃子を奏しながら橋を渡る(写真3)。

以上のように、小路渡りとは本海流獅子舞番楽の盆獅子と同じ系統の行事であり、今回の調査で小路渡りとの比較検討のために、本海流獅子舞番楽の二階番楽の盆獅子の調査を行ったが、ほぼ同内容の行事を行っていた。しかし、二階番楽では座敷で祓い獅子を行う場合は仏壇に向かつて舞うのに対し、坂之下番楽では祓い獅子は神棚に向かつて舞



写真2 小路渡り(道切)



写真3 小路渡り(橋渡り)

うものというような認識の違いが見られた。

小路渡りでは、坂之下集落の全五七戸を廻るため、若者たちが交替で獅子舞や囃子を担うため、一晚に何度も舞うことで獅子舞をしっかりと学ぶ場ともなっている。坂之下ではたとえ番楽がなくなることがあったとしても獅子舞だけは必ず残したいという思いがあり、獅子舞を最初に習わせているのだという。

### C 柱がらみ

坂之下番楽では、新築の家や神社の造営などの際に火伏せの行事として柱がらみを行う。青森県・岩手県の旧南部藩領の神楽では、修験の神楽が春祈禱という廻村行事では火伏せの権現舞を舞っている。また、新築の家では柱固めという権現様が柱を噛む火伏せの行事は行われるが、この坂之下番楽の柱がらみもこういった近世の修験者の廻村行事の名残を留めるものと考えられる。なお、柱がらみは家を新築した個人から依頼があった場合のみ行われる。

新築の家では、茶の間や座敷の柱に紅白の布を巻き、座敷の長押に注連縄を張る。行事はまず、先番楽、四季舞、三番叟、伊賀の順で舞い、前舞の獅子舞を舞って次にお祓いとなる。お祓いでは御幣、焼薪木、刀、水ホーキ、扇、手拭いの順に獅子に噛ませる。次に獅子は長押に張られている注連縄を一周し、後舞の獅子舞をして終える。

お祓いをする座敷には、八足台あるいは机の上に先に述べた獅子がお祓いをするものやお供えが並べられる。机の前に座った者が獅子にひとつひとつ道具を差し出し、獅子はそれを噛んだまま一周して戻す。小滝、吹浦などで行われる御頭舞（御宝頭、十二段の舞）では、神職がこれと同じように剣やお札を差し出し、獅子はそれを飲み込んで胎内で浄め、口から再び出すというお祓いを行うが、柱がらみのお祓いでは胎内に取り込まないまでも、良く似た所作を行う。このように、獅子が物を噛んだり、胎内に取り込むのは浄

めるという機能を持っている。

### (3)上演目目

坂之下番楽に伝える『獅子舞言立 全』には、獅子舞以外の十九の舞の言立てが載せられている。獅子舞とこれらの舞を分類すると次のようになる。八月十四日の後番楽ではこれらの演目を三時間程度で構成して上演している。後番楽では必ず獅子舞で幕を開けるのが決まりとなっている。

平成二十七年と平成二十八年の二度に渡って後番楽の調査を行ったが、その時の演目は次の通りである。後番楽は坂之下公民館前の特設舞台で行われるが、平成二十七年の時は雨天であったため、坂之下公民館二階大広間で行われた。

- ◎平成二十七年八月十四日 午後七時十八分より午後九時五三分まで
- ①獅子舞、②四季、③三番叟、④ススガ舞、⑤伊賀、⑥三人太刀、⑦餅搗、⑧武士舞、⑨空白からみ、⑩小弓舞
- ◎平成二十八年八月十四日 午後七時十四分より午後九時十九分まで
- ①獅子舞、②三番叟、③すが舞・可笑、④伊賀、⑤木曾・今田八郎、⑥餅搗、⑦三人太刀、⑧空白からみ

### A 獅子舞

獅子舞は獅子の舞手幕取りの二人によるもので、まず「前がかり」で前に一礼し、幕取りが手に持つ獅子頭を舞手に手渡す。続いて、「手舞」となり、獅子に扇を噛ませ、その前で手舞、扇を持つ扇舞、剣を持つ剣舞、再び手舞となる。剣舞では舞手は爪先で地に「申」という字を書き、すぐに爪先で地を横に蹴るように字を消す（写



写真4 獅子舞（神舞）

真4)。これも祓いの意味とされている。本海流獅子舞番楽では、申の他にも忠の字を書く獅子舞がある。続いて、獅子を被つて後獅子となる(写真5)。後獅子の「四方固め」となり、祓いとくずしの型で獅子を振る。後獅子では、観客を祓う場合があるが、岩手県の大森町の身固めのように頭や身体を噛んだりするようなことはせず、観客の頭上から足に向かって獅子の口を開け、悪いモノを吸い込むかのように獅子をゆったりと横に振る。地元では獅子の口から悪いモノを吸い取り、それを胎内で清めた後に反対側に吐き出しているのだと考えられている。



写真5 獅子舞

獅子舞は番楽で舞われるだけでなく、廻村行事の小路渡りや新築祈りの柱がらみなどでも舞われるが、これは前述の通りである。また、講中の亡くなつた時も納骨の際に墓の前で小路渡りの橋渡りの際に奏する早三島を歌い、その間に祓獅子で墓を祓うという。

## B 式舞

①四季・舞台清めの舞として番楽太郎を舞う(写真6)。この舞を間違えるとすべての舞を間違えるといわれている。

②翁・翁面を着けた一人舞。「東を伏し拌んで見奉れば、薬師の浄土も目高く見えます」というように、以下、南に観音の浄土、西に阿弥陀の浄土、北に釈迦毘沙門の浄土というように四方の浄土を伏し拌み、人々の長久繁栄、息災延命を祈り、大地を踏み鎮める。各地の神楽のように神道化の影響をあまり受けていないようで、言い立ては



写真6 四季

四方の神ではなく、四方の浄土に拝するといふところが特徴と言える。

③三番叟・翁が静であるならば、三番叟は動と言ふべき舞で、黒式尉の面を着け、扇と錫杖を手に持った三番叟が中腰になって力強く足を踏みながら四方固めを行う(写真7)。番付の早い段階で舞われる舞とされる。坂之下では中腰になる舞が多いが、これは前述のように本海行人が高齢になってから坂之下で教えたため、坂之下の舞は腰が低いのだと言われている。



写真7 三番叟

④伊賀・鬼面の舞で、本地仏である八幡大菩薩の舞とされる激しい舞で、坂之下では地固めの舞とされている。「おお、あれは本地八幡大菩薩の御神体にてましまさば」という言い立ては能『弓八幡』の謡との共通性が指摘されているが、大口袴を履く姿もどことなく能を感じさせる。

⑤鳥舞・鳥兜を被つた雌雄の二人舞で、雄鶏は力強く、雌鶏は優雅に舞うものとされる。

⑥五拍子・最初は静かに、次第に荒舞へと変化し、式舞の所作も加わることから、番楽の基本の舞とされる。

⑦地神舞・四方固めの舞。言い立てにある「まんだらよんねの世にまれて芦原長者の世なれば、まけどもまけども尽きもせず」という歌は、秋田県鹿角市の大日堂舞楽の大小行事では、「曼荼羅降るや米降るや、有屋の浄土の米なれば、蒔けども蒔けども、尽きもせず」と歌われ、福島県二本松市広瀬熊野神社の御田植などでも同様の歌が歌われる。これらの芸能では散米の際にこの歌が歌われ、豊饒を祈る歌とされている。

## C 神舞

⑧小弓舞・小弓を持った二人舞(写真8)。言立本に「向矢先に悪魔来たらず」



とあるように、弓矢を三回ずつ発するしぐさをし、八幡神の神徳の弓矢で悪魔を祓う。小弓を用いる舞は青森県の津軽神楽「弓立」、青森県八戸市の法霊神楽「山の神」、北海道道南の松前神楽「神遊舞」などにも見られ、こちらでは天井に向かって三度矢を放ち、天井に矢が刺さるまで所作を繰り返す。この舞は坂之下では仕上げの舞とされ、最後に伝習される舞だという。



写真8 小弓舞

⑨三人太刀(三人立)…三人の舞手が剣を持って曲芸的に舞う(写真9)。三人が剣を持って円を描き、その輪を抜ける曲芸的な舞として人気がある。



写真9 三人太刀(三人立)

⑩山の神…山の神が剣を持って荒々しく舞う。東北の神楽では山の神はとても大切な舞とされ、各地の神楽で舞われている。言い立てや背中に二本の御幣を交差させて差すなどの共通点が見られる。

#### D 武士舞

武士舞の演目について述べる前に、この武士舞の成立について少し考えてみたい。番楽の武士舞には「志賀団七」や「熊谷」など芝居から取り入れたと思われる舞が少なくない。「志賀団七」は安永九年(一七八〇)に江戸外記座で初演された芝居『碁太平記白石噺』がもとで、その後、全国的に流行した団七踊りの系譜を引くものと考えられ、「熊谷」は宝暦元年(一七五二)に大坂豊竹座で初演された『一谷嫩軍記』の「組討の段」が下敷きにあると考えられる。坂之下には「武士舞」(平成二十七年八月十三日調査の際に実見)

という二人の武士が立ち廻りを演じる台詞のない武士舞がある(写真10)。この武士舞は、まず最初の舞手が舞い、そこにもう一人の舞手が登場して舞い、立ち廻りとなるという構成で、この舞に台詞を加えると熊谷としても橋弁慶としても舞える武士舞の型となる舞だと考えられる。このように、武士舞は題材さえあれば増産が可能だったと思われる。坂之下には大正九年(一九二〇)の神楽本しか残されていないため、これらの武士舞がいつの段階で番楽で舞われるようになったのか不明だが、武士舞は、矢島や本荘など近隣の芝居興行などで芝居を見て題材を仕入れ、こういった舞の中に組入れ、余興として舞ったと考えられる。また、本海流獅子舞番楽では、花の口上に芝居の口上が入っており、ここからも芝居との関係性が窺える。



写真10 武士舞

次に言立本にある武士舞を紹介する。

⑪那須与一…源平合戦の屋島の戦いにおける那須与一の活躍を描いた舞。

⑫木曾・今田太郎…女舞で、木曾義仲の四天王のひとり・今井四郎兼平の姉妹である巴と山吹が討ち死にした葵を偲ぶ華麗な女舞で、この舞が終わると敵の今井太郎が登場し(写真11)、二人が敵を討つというもので、二部構成の舞とされている。

#### E 女舞

⑬スガガ舞・可笑…しとやかな女舞で、途中から道化の可笑が登場し、おかしなやりとりをする(写真12・13)。

⑭蕨折…東北各地で舞われる狂言舞。



写真11 木曾・今田八郎



⑬ 餅搗…余興として舞われるもので、餅搗きのしぐさをして舞う（写真14）。

G その他

⑭ 空（唐）白からみ…大変人気のある余興の舞で、最後の演目として舞われることが多い。派手な袖長襦袢に黒股引を履き、三角頭巾を頭に被り、褌を掛けた四人の舞手が搗き棒を片手に軽快に舞う（写真15）。搗き棒で白をリズムカルに叩き、二人が交互になつて棒を絡ませながら十二の拍子を



写真13 可笑



写真12 ススガ舞

坂之下では言立本に残されているが、現在は舞われていない。

F 道化舞

⑮ ソツソク…余興の道化舞。拍子に合わせて即興的に舞う。

⑯ 餅搗…余興として舞われるもので、餅搗きのしぐさをして舞う（写真14）。

G その他

⑭ 空（唐）白からみ…大変人気のある余興の舞で、最後の演目として舞われることが多い。派手な袖長襦袢に黒股引を履き、三角頭巾を頭に被り、褌を掛けた四人の舞手が搗き棒を片手に軽快に舞う（写真15）。



写真14 餅搗



写真15 空（唐）白からみ

舞ってゆく。途中で一人づつ輪を離れて鳥刺舞の一節を披露する。

(4) 獅子舞の仕度等

坂之下には現役の獅子頭（縦29・1cm、横17・6cm、高さ14・4cm、鼻高10・4cm）がある（写真16）。これは頭上に鏡を戴き、髪は布製、付け耳というもので、幕（縦163・5cm、横210cm）は鱗模様。坂之下番楽では獅子の魂入れは獅子頭が完成した際に行い、現役の間は魂抜きをしない。獅子頭は「八幡様」と呼ばれることがある。獅子の布製の髪は、立願の時に髪を一本持ち帰り、願を果たした時に三本にして返す。この立願は講中の家の者がよく行っていたという。



写真16 獅子頭

ほかにもう一つ隠居獅子（縦35・4cm、横20・2cm、高さ14・4cm、鼻高11・3cm）がある。中には「奉納 茂木ナヲ 昭和九甲戌年」と書かれている。茂木ナヲ氏は講中の前代表の母に当たる方だという。こちらも髪は布製、付け耳となっている。

(5) 番楽の仕度

坂之下番楽には番楽面が一点ほど残されている（写真17）。面の詳細は次の通り。

- ① 伊賀（縦23cm、横16cm）、② スズカ（女面、縦20・7cm、横13・8cm）、③ 三番叟（縦19cm、横12・9cm）、④ 木曾（女面、縦18cm、横11・8cm）、⑤ 木曾（女面、縦19・7cm、横12cm）、⑥ 可笑（縦19・7cm、横12・9cm）、⑦ 餅搗（縦18cm、横13cm）、⑧ 翁（縦18・7cm、横12・7cm）、⑨ 武士面（今田八郎や那須与一で使用する、縦21・3cm、横13・9cm）、⑩ 山伏面（那須与一

で使用する。内側には墨書で「今田八郎」と書かれており、かつては今田八郎として遣われていたものと思われる。縦20・5 cm、横12・5 cm)、⑩ひよつとこ(縦21 cm、横13・8 cm)、⑫翁(縦19・4 cm、横13・8 cm)、⑬武士面(縦19・8 cm、横13・8 cm)、⑭笑み面(縦18・5 cm、横13 cm)。現在の番楽で使用されているのは①から⑨までの面で、⑩から⑭までの面は落款が押されており、同一作者の面だ



面⑬ 武士面 面⑨ 武士面 面⑤ 木曾 面① 伊賀  
面⑭ 笑み面 面⑩ 山伏面 面⑥ 可笑 面② スズカ  
面⑪ ひよつとこ 面⑦ 餅搗 面③ 三番叟  
面⑫ 翁 面⑧ 翁 面④ 木曾

写真17 面①～⑭



写真18 番楽幕(現在)

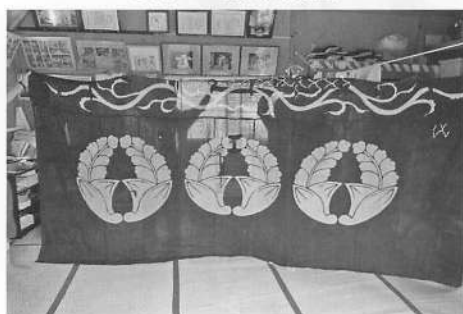


写真19 番楽幕(古)

が、番楽では使用されていない。  
最後に番楽幕について述べておく。現在の番楽幕(縦210 cm、横400 cm)は平成二年(一九九〇)の国立劇場出演を記念して製作したもので、幕には生駒家の半車紋が描かれ、左隅に「平成二年六月吉日 国立劇場出演記念」と書かれている(写真18)。古い幕(縦181 cm、横400 cm)は年代未詳で藤の紋が描かれている(写真19)。

(6) 歌・節・言立など

歌や囃子は舞台に向かって左手に一直列で並ぶ。手前から太鼓、鉦、笛、歌の順となる。太鼓のバチは、他の講中ではケヤキのバチが多いが、坂之下ではトズルやアガンチャなど地元で取れる木の枝で、山に入って自分たちで取ってきて枝を削ってバチにする。叩いた時にしなる方がいいのだという。

現在のメンバーには笛に女性が加わっているが、これは平成二年の国立劇場公演出演以降のことだという。また、坂之下でも余所と同じく舞を習う際は口唱歌を唱えて舞を覚えるが、坂之下の口唱歌は笛と太鼓の節の両方が混ざった独特のものとなっている。口唱歌は地元では「口拍子」と呼ぶ。

なお、前述のように大正五年の火災で記録類が消失してしまい、古い言立本も残されていない。現在残されているのは現在の言い立てを記した『獅子舞言立 全』のみとなっている。

(7) 昔(過去)の状況

現在の伝承館(写真20)が昭和六十二年(一九八七)に建てられる前は、当番制で番楽の道具類を個人宅で預かっていた。大正五



写真20 番楽伝承館

年（一九一六）に火事が起こり、道具類と記録類がすべて消失してしまった。この時は秋田県雄勝郡羽後町の仙道番楽の道具類を譲り受けて番楽を継続したという。

現在の後番楽は、公民館前に舞台を設営して行っているが、かつては熊野神社拝殿前に舞台を設け、そこで行っていた。その頃は番楽の後の直会の席では重箱に詰めた料理を用意し、みんなで食べながら飲んだという話が聞かれる。

（註）

- （一）『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』鳥海町教育委員会、二〇〇〇年三月、一三頁。
- （二）木村掬郎『わたくしの春秋』私家版、一九八七年、一二頁～三三頁。
- （三）本田安次「山伏神楽・番楽」『本田安次著作集第五巻 神楽Ⅴ』一九九四年、五三三頁。
- （四）『御納戸日記・御用部屋日記抄（一）』郷土資料第二集、矢島町教育委員会、一九九六年三月、一八頁。
- （五）前掲（三）二四頁。
- （六）前掲（三）二九頁。
- （七）前掲（三）三二頁。
- （八）『御納戸日記・御用部屋日記抄（二）』郷土資料第三集、矢島町教育委員会、一九九七年二月、九二頁。
- （九）『御納戸日記・御用部屋日記抄（四）』郷土資料第五集、矢島町教育委員会、一九九九年、九二頁。
- （十）『鳥海町史資料編』鳥海町、一九八七年二月、五八五頁。

（参考文献）

神田より子『鳥海山修験―山麓の生活と信仰―』岩田書院、二〇一八年三月。

（神田竜浩）

第二節 屋敷番楽

（一）地域の概要

屋敷番楽が伝承されている屋敷（旧由利町）は、由利本荘市の西南部に位置し、三方を由利原に囲まれた山あいの集落である。現在集落は二二戸で形成されているが、江戸時代から三〇戸以上に増えることはなかったという。伝承によると、集落の開祖は巴頼勝と言ひ、木曾義仲の愛妾、巴御前の一門であったとされる。巴一族は、共に戦った木曾義仲が源義経によって滅ぼされた後流浪の旅を続けた。仁治年間（一二四〇～一二四二）にこの地に移り住んだと言われており、頼勝の館跡である「巴館」が現在史跡として伝わる。

屋敷は、慶長年間には山形の最上領に属していたが、元和九年（一六二二）に本荘藩に属するようになった。明暦年間（一六五五～一六五七）頃から「屋敷村」の名が見られることから、この頃には集落としての形が整いつつあったことが分かる。明治時代以降、屋敷は鮎川村に属し、昭和三十年（一九五五）に由利町、平成十七年（二〇〇五）には由利本荘市に属する。集落では稲作のほか、山あいの地域を活かして、木材やタバコ、木炭などを生産しており、昭和に入ると、由利原で酪農などが行われるようになった。また、道路の整備によって遠隔地までの通勤が可能になったこと、由利原の豊富な資源に恵まれ、発電所や石油採掘工場が建てられたことから、現在では農業を営む一方で、企業に勤める人も多くなっている<sup>1)</sup>。

（二）番楽の由来

伝承によると、天明年間に由利本荘市荒沢集落から伝えられたとされる。天明三年（一七八三）に由利地方を襲った飢饉をきっかけに、悪魔退散の目的で、集落の何人かが荒沢集落に獅子舞を習いにいったことが番楽のはじま

りである。荒沢集落には本海上人から習った本海流獅子舞番楽が伝えられており、屋敷もその流れをくむとされる。

### (三) 保存団体と番楽の伝承

#### (1) 保存団体

屋敷番楽の伝承団体は当初「獅子舞連中」と呼ばれ、太平洋戦争までは集落に住むア二（長男）しか入ることができなかつた。しかしながら徴用や徴兵によつて多くの男性が集落からいなくなると、番楽を維持することが難しくなり、昭和二十年代には長男に限らず男性であれば獅子舞連中に入ることができるようになった。

昭和三十年、東滝沢村、西滝沢村、鮎川村の三村が合体して由利町が誕生する。町内に由利町芸能保存会が出来、このことをきっかけとして、屋敷でも獅子舞連中から屋敷番楽保存会が作られた。

現在保存会には二五人の会員がいる。ほとんどは集落内に住む人だが、近隣集落へ転居した人も含まれる。保存会は、会長、副会長、会計、師匠、門弟で組織され、会長から会計までは一期二年で年限はない。それぞれの役員は二月に開かれる総会で承認される。

師匠は舞や楽器を指導する人で、任期などはない。門弟は番楽を習う人で、現在は小学校五年生位から入ることができる。

#### (2) 番楽の伝承方法

屋敷番楽には演目ごとに舞、笛、太鼓、鉦、言立の師匠がいる。舞や楽器はその人ごとの特性によつて向いているものを教えていくという。保存会に入ると、師匠から指定された舞の演目を覚えていく。はじめに覚える舞は三人立といわれる。三人立には舞の基本が入っており、また複数人で覚えられ

によつて舞うものを決める。ただ、演じる時には舞の意味と、舞は神社に奉納するものであるという心構えを持つように教えられる。

楽器類には楽譜などはなく、師匠の演奏を見て覚える。一番難しいのは笛で、笛が演奏の要になると言われている。

### (四) 演目とその変化

#### (1) 言立本からみる演目

屋敷には現在使用している言立本のほかに、二種類の言立本が残されている。

ひとつは保存会に伝わる言立本で、年代は書かれていないが、「覚 佐藤梅哉 年七十三才」とはじめに書かれている。佐藤梅哉は明治生まれであると言われているため、この言立本は昭和三十年頃に書き写されたものと推測される（写真1）。

もうひとつは個人宅に伝わる、明治三十六年（一九〇三）旧暦六月十一日に書き写された言立本である（写真2）。

各言立本には一丁目に演目名のみ書かれており、当て字があるものの、二つの言立本には二一演目同じ順序で、同じ演目名が書かれている。しかしながら言立の台詞が書かれている演目については両者に大きな違いがあり、保存会所蔵の言立には一四の演目が、個人宅に伝わる言立本には二一の演目が書かれている。中には一丁目に書かれている演目にないものも含まれており（表1）、保存会蔵の言立本と個人蔵の言立本はそれぞれ異なった原本から書き写されたと思われる。



写真2 個人蔵立本



写真1 保存会言立本



表2 県指定申請時の演目

1	○神舞
2	○獅子舞
3	○先番楽
4	○翁
5	○三番叟
6	○餅つき
7	○五条橋
8	○三人立
9	○鳥舞
10	○志賀団七
11	○橋引
12	○空白舞
13	小弓の舞
14	忍太郎景時
15	可笑番楽
16	バクチ三番叟
17	蕨折り
18	若児
19	八沢木獅子
20	治神楽
21	八ツ日照

\*○は当時舞うことができた演目

表3 現在の演目

1	神舞	
2	獅子舞	
3	先番楽	
4	翁	
5	三番叟	
6	鳥舞	
7	弁慶	
8	餅つき	
9	志賀団七	
10	空白舞	
11	三人立	昭和40年頃復活
12	橋引	昭和40年頃復活
13	可笑	昭和40年頃復活
14	矢嶋小弓	平成2年復活
15	神々舞	平成3年復活
16	治神楽	平成4年復活
17	腰小弓	平成6年復活
18	蕨折り	平成7年復活
19	忍	平成13年復活
20	熊谷	平成13年復活

表1 演目名のちがひ

	保存会蔵	熊谷治郎家所蔵(明治36年写)
演目のみ *太字は言 立が書かれ ている演目	一 先キばんがく	一 先晩学
	二 とりまへ	二 とりまへ
	三 翁	三 翁
	四 さんバそふ	四 さんバそう
	五 ミかぐら	五 みかぐら
	六 内裏ノ后若子	六 内裏ノ后若子
	七 曾我まへ	七 曾我舞
	八 可笑	八 可笑
	九 忍の太郎	九 忍ノ太郎
	十 はだおり	十 はだおり
	十一 矢し間	十一 矢嶋小弓
	十二 義経公関破	十二 義経公関破
	十三 熊谷治郎	十三 熊谷治郎
	十四 鈴木三郎	十四 鈴木三郎
	十五 蕨折	十五 蕨折
	十六 西塔弁慶	十六 西塔弁慶
	十七 ちがらく	十七 ちがらく
	十八 日向八日照小弓	十八 日向八ツ日照小弓舞
	十九 松迎ひ	十九 松向
	二十 橋引	二十 橋引
	二十一 三人立チ	二十一 三人立
言立の書か れているも の	1 翁	1 翁
	2 三番叟	2 三番
	3 鶏舞	3 鶴舞
	4 若子舞	
	5 曾我	4 曾我
	6 蕨折	5 わらび折り
	7 祖父翁舞	6 祖父翁舞
	8 忍の太郎景時	7 忍の太郎景時
	9 機織	8 機織
	10 機織しゃもん	9 機織しゃもん
		10 機織る時うた
		11 鈴木三郎重家
	11 重家高館合戦之事	12 重家高館合戦之事
	12 義経公吾妻下タリ	13 義経公吾妻下タリ
	13 橋引翁しゃもん	14 橋引舞しゃもん
		15 はしひき調夕
		16 熊谷治郎一ノ谷合戦ノ事
		17 佐藤次信 忠信矢嶋団の浦合戦
	14 裏矢し間	18 裏矢嶋
		19 弁慶舞
		20 松迎舞
	21 小田八郎 きう舞	

(2)現在の演目

屋敷番楽が昭和四十六年に県指定無形文化財に申請した書類には、二一の演目が書かれている。このうち当時は一二演目について演じるこゝとが可能であった(表2)。ここにはさきほどの二冊の言立本にない演目が書かれているが、どの言立本を参考にして申請されたものかは不明である。屋敷番楽は、太平洋戦争のあった昭和二十年代には伝承される演目が一〇まで減少し、昭和二十年には番楽の活動自体中止を余儀なくされた。しかし戦後徐々に復活していき、平成七年までに一八演目を演じることができるようになった。平成十三年には信夫、熊谷の二演目が復活され、現在では二〇演目が演じられている(表3)。

演目の復活には、集落内に覚えている人がいない場合、以前屋敷番楽を演じたことのある、他集落へ移住した人に屋敷へ来てもらって舞を習ったという。こうして習った舞が「治神楽」「矢嶋小弓」「腰小弓」「神々舞」である。

現在は式舞である神舞、獅子舞、先番楽、翁、三番叟まで順に舞い、その後は人数や準備の関係で舞えるものから舞っている。演目については見る人が飽きないように工夫をし、同じような舞が続かないようにする。ただし最後は必ず空白舞で終わるようにしている。

番楽の拍子には三拍子、五拍子があるといわれる。三拍子はテンポが速くて賑やかであり、五拍子はテンポが遅く勇壮といわれるが<sup>⑤</sup>、三拍子の方がテンポが遅いと伝えられているところもある<sup>⑥</sup>。屋敷番楽は一般に五拍子といわれているが、テンポの早い遅いについては、伝承者によってさまざまである。

### (3) 演目の内容と舞い手

ここで、屋敷番楽の各演目の内容について触れたい。

①神舞…天下泰平、五穀豊穰、悪疫退散を願う舞。舞台中央に獅子頭が置かれ、「獅子の児は生れ落とると頭振る」と神舞の唄が歌われると、獅子を操る二人が頭に鉢巻きをし、襦袢と縦縞の袴をつけた番楽の基本の姿で登場する。前の一人が獅子頭を持ち、後ろの一人（おっぼとり）は獅子の尾を持って前の人の体に獅子幕を巻きつけるなどし、獅子を持つ人は、獅子頭を上下左右に振り、何度も歯を鳴らす。その後、舞台中央に獅子頭を置き、獅子頭に向かって扇や剣、布など用いて獅子頭の前で舞を舞う。

②獅子舞…悪疫退散を願う舞。神舞の時と同じ唄が歌われ、獅子を操る二人が登場する。前の人は獅子頭を左手に、獅子幕を右手に持ち、後ろのおっぼとりは獅子の尾を前の人の体に巻き付けるしぐさをする。獅子頭を上下左右に振り、歯を激しく鳴らすことは神舞と同じだが、神舞よりも激しい踊りになっている。この舞には、「天地和合」、「龍門の振り返し」、「三条のみこし」という三要素が含まれているといい、「天地和合」では歯を激しく打ち鳴らし、「龍門の振り返し」では髪を振り乱しながら左右に頭を振る。そして「三

条のみこし」で獅子頭を高く上げて静止させ、回りを見回す動作を行い、この三要素を組み合わせて舞うという<sup>⑦</sup>。

③先番楽…番楽を舞う前の清めの舞。基本の姿をし、烏帽子をかぶった舞手が扇を持って登場する。唄はなく、切り拍子を笛、太鼓、鉦で演奏する。中盤あたりになると「よいよいさー」というかけ声が掛けられ、その声に合わせて舞手が扇を両手で持って頭を小刻みに振る。その動作を舞台の四方でくり返す。

④翁…めでたい言葉を並べて、無病息災、延命を祈る舞。本海上人が高齢になつてから伝えられた舞であるため、腰の曲がった舞になつたと伝えられる。翁の面をかぶった舞手は扇を持って幕の前に座っている。「ちりりららるや、らりるや それなにしよの」と翁の唄が歌い終わると拍子が入り、翁は片手で扇を持って腰を曲げて舞う。足で円を描いたり、小刻みに踏みならしたりし、同じ仕草を四方でくり返し行う。

⑤三番叟…黒尉面をかぶり、陣羽織の前がはだけた姿で、右手に扇、左手に錫杖を持って舞手が登場する。左右に跳ねながら、両手を広げた後に扇と錫杖を抱え持つような仕草をし、頭を振る舞を繰り返す。舞の合間に扇を左右に揺らし、錫杖を鳴らしながら、先に舞った翁の紹介をする。「翁」に比べて動きが早く、めでたい言葉を発しながら活発な舞を舞うのが特徴である。

⑥鳥舞…天の岩戸が開かれた時、鳥が夜明けを知らせて舞ったものとされる<sup>⑧</sup>。烏兜をかぶった雌雄の鳥の舞手が激しく頭を振り、烏兜の羽を揺すりながら舞う。はじめは両手を組んで舞うが、中盤あたりで右手に錫杖、左手に扇を持って舞う。曲の途中、手で烏兜の羽をかき上げる動作を繰り返す。

⑦弁慶…京都の五条の橋で、百本の刀を集めようとした弁慶と牛若丸の戦いの舞。顔を白い布で覆い、白いしゃがまをつけ、鎧をまとった牛若丸が扇を持って激しく舞う。中盤で、顔を白い布で覆い、黒いしゃがまをつけ、鎧をまとった弁慶が長刀を持って登場する。牛若丸と弁慶との戦いが続き、先に

牛若丸が退場する。弁慶はその後長刀を振りながら、舞台を何度も踏み固めた後退場する。

⑧三人立…猪に農作物が荒らされ、神に五穀豊穡を祈願する舞であり、地固めの儀式としての意味を持つ舞でもある。白布で顔を覆い、黒色のしやがまをかぶった三人の舞手が、股引をはき、左足に白布を結び、たすきを掛けて登場する。本海番楽では太刀を持って舞うが、屋敷の場合は木製の棒を持って舞う。

⑨餅つき…道化の踊り。面をかぶり、赤い布袋を肩に掛け、股間にしやがまをつけた男が扇を持ち、大きく足踏みして、餅を搗く動作を繰り返す。男の左足にも白い布が結んである。「そーらつけ、そーらやれ」のかけ声とともに、男は布を餅に見立てて捏ねる仕草をし、餅に見立てた布で股間や体を拭き、観客を笑わせる。その後男は観客席に行き、観客に餅を食べさせる仕草をした後舞台に戻る。舞台には面をかぶり、人形を背負って桶を持った女が登場している。しばらく二人で餅をつき、最後に男が女を、もしくは女が男を背負って退場する。

⑩矢嶋小弓…東西南北に弓を向け、悪魔を退散させるための舞。「七日より、七日より浜の真砂の数よりもなおも久しき神代を御代かや面白や面白や、それにつけても面白や」と歌った後、白いしやがまをつけ、鎧を着た二人の舞手が右手に錫杖、左手に扇を持って登場する。右手の錫杖を鳴らしながら横にはらう動作を繰り返しながら舞う。その後、左手に弓、右手に矢を持ち、四方に弓を射るしぐさをしながら舞う。最後は刀に持ち替え、刀を回したり、振り上げたりしながら、飛びはねたり、足を交互に踏んだり、激しい動きをくり返す。

⑪橋引…奥州名取川（現福島県）では、洪水でたびたび橋が流された。そこで樹齢七〇〇年の杉の木を利用して橋を作ろうと、古川源兵衛に頼んで杉の木を引いてもらう。屋敷番楽では道化舞になっている。はじめに水玉の衣

装を着、黒い面をつけ、腰にこだしを背負った古川源兵衛がおどけた仕草をする。その後、言立と秋田弁でのやりとりがあり、観客を笑わせる。その後、長い布を出し、布の長さを計ったり、扇を持って舞ったりしていると、幕の中から布の端を持ち、紫の頭巾をかぶった女と、獅子が登場する。獅子は浴衣を着た二人が操り、激しく歯を打ち鳴らす。布の端と端とを源兵衛と女とが持ち、その後を獅子が激しく歯を鳴らしながら従う。

⑫神々舞…舞手が足踏みをしながら、庭の四方を踏み沈める神遊びの舞で、平成三年に復活した。黒いしやがまをつけ、襦袢と縦縞の袴をつけた舞手が右手に錫杖、左手に扇を持って足踏みしながら、錫杖を横にはらったり、扇を高く掲げながら舞う。

⑬可笑…道化舞のひとつ。面をつけ、蕨折りの爺が着る水玉の衣装を着て、股間にしやがまをつけた舞手が、扇を持って踊る。腰に手を当て、何度も飛び跳ねたり、舞台を回ったりと激しい舞を繰り返す。

⑭志賀団七…姉妹が仇討ちをする、女性が主役の番楽。父与太郎と、その娘の姉妹が田んぼの草取りをしていたところ、娘の投げた草の泥が、武士である団七の袴にかかってしまう。怒った団七は父親の与太郎を殺す。残された姉妹は由井正雪の弟子になり、父親の仇を討つ物語である。はじめに紫の頭巾をかぶった姉妹が紫の扇を持って舞を舞った後、黒いしやがまをつけ、鎧と陣羽織を着た団七が、右手に扇を持って頭を振ったり、足を踏みならしたりして力強く舞う。その後、白い布で顔を覆い、たすき掛けをした姉妹が、長刀と鎖鎌を持って登場し、団七と刀や長刀を打ち合う舞を繰り返して、団七を討ちとる。その後姉妹は紫の扇を持って勝ちどきの舞を舞う<sup>10)</sup>。

⑮治神楽…神に仕える剣の舞とされ、平成四年に復活した。黒いしやがまをつけ、赤いたすき掛けをした舞手が右手に扇を持って登場し、足踏みを繰り返す。中盤から刀に持ち替え、はじめは刀の鞘を左右に振ったり、高く掲げ上げたりするが、刀を抜いて、刀身と鞘を回したり、上下に振った

りする動作を繰り返す。

①⑥腰小弓…平成六年に復活した舞。鳥舞の時の鳥兜をかぶり、襦袢と縦縞の袴をつけた二人の舞手が登場する。二人は腰に手を当て、向かい合って舞い、時折右手と右手、左手と左手をあわせながら四方を舞う。その後弓矢を持ち、しゃがみながら矢を射る仕草をしたり、立ち上がったて大きく弓矢を振りまわしたりしながら四方同じ動作を繰り返す。

①⑦蕨折り…この物語は、娘が年老いた両親に初蕨を食べさせたいと山に蕨採りに行くところから始まる。娘が川を越えることができずにいるところを、爺翁じぢという男が出て来て、娘に「嫁になるなら川を渡してやる」と言う。娘は承知して、無事に蕨を採ることができた。爺翁は娘に、すぐに嫁になればと言うが、娘は三日三晩待つて欲しいと懇願する。結局娘は一晚だけの猶予をもらい、両親のもとに帰る。爺翁が娘を待つてるところ、一人の爺が薪拾いに来る。爺は爺翁にいろいろといたづらをし、川に流してしまふ。怒った爺翁は正体をあらわし、鬼の姿になって爺を追いかけて、縛って連れて行ってしまう。その結果、娘は爺翁から逃れることができたのだ。舞は紫の頭巾をかぶり、右手に錫杖、左手に紫の扇を持つて面をかぶった娘と、白い帷子を着、烏帽子をつけ、面をかぶった爺翁とのやりとりではじまり、後から水玉の派手な服装をし、面をかぶり、右手に扇、左手に鉞を持った爺翁が登場する。爺翁と翁とのやりとりが秋田弁で行われるなど観客の笑いを誘う舞である。

①⑧空白舞…豊作祈願の舞。屋敷番楽の最後に必ず舞われる舞である。はじめ舞台中央に白が置かれたところへ、鉢巻きをし、たすきを掛けた四人の若者が木の棒を持つて登場する。四人の若者は白のまわりを回りながら棒で白の側面や底の部分のリズミカルに叩く。だんだん動作が激しくなっていく、最後は白を返し、白の底を観客に見せて終了する。

①⑨忍(忍の太郎景時)…奥州平泉高館合戦の際に奮戦した信夫太郎景時の舞

で、平成十三年に復活した。言立は景時の装束や戦いの様子について語る。布で顔を覆い、白いしゃがまをつけ、鎧を着た舞手が、袴をたくしあげ、右手に扇を持つて足を高く上げながら舞う。

②⑩熊谷(熊谷二郎直実)…平成十三年に復活した舞。平家物語に登場する熊谷次郎直実と、平敦盛との一騎打ちをうたったもので「熊谷や熊谷やあつもり討とうととのり出デる くびをとらんでただもどる」と唄う。顔を覆い、黒いしゃがまをつけ、鎧を着た舞手が右手に扇を持ち、左手で腰の刀を押さえながら、足踏みを繰り返す。中盤では扇から刀に持ち替え、刀を振ったり何度も飛び跳ねるなどの激しい舞を繰り返す。

#### (4)獅子の形態と扮装

屋敷番楽でも、獅子舞は重要な舞とされている。獅子舞は二人立で、獅子頭を操る人と、獅子幕を持つ人とで演じられる。後ろの獅子幕を持つ人を「おっぼとり」と言う。獅子頭を操る人は複数いるが、おっぼとりは慣れている人でなければ操れないため、決まった人が演じる。獅子舞を演じる時には獅子頭を持つ人も、おっぼとりも、獅子幕を頭からかぶることはせず、布を肩にかいたり、尻尾を体に巻くなどするのみである。獅子舞の最中、何度も獅子頭を激しく振り、「歯打ち」を繰り返すことが舞の特徴になっている(写真3)。



写真3 獅子舞

#### (5)お花の御礼

演目の合間には「お花の御礼」が披露される。これは、番楽を演じる間に数度行われるもので、幕から日の丸の扇子を出し、節をつけて「とざいとう



ざい、さて今晚そそうなる晩楽につきましてちよつと御花の御礼を申し上げ  
ます……」と口上を述べた後に御奉仕の紹介を行う。お花の御礼は言立を担  
当する人が行う。お礼を述べている間、幕から飛び出さんばかりに扇子を前  
に出したり、左右に動かしたりユーモラスな動きをする。「お花の御礼」は古  
い言立本に書かれていないため、いつから始まったか定かではないが、本海  
獅子舞番楽下百宅講中及び中直根講中の言立と共通する文言がみられる<sup>12)</sup>。

(五) 番楽の一年

(1) 頭がため

屋敷では、番楽をはじめの日のことを「頭がため」と言う。この日に保存  
会の人々が集まり、直会を行い、その年の練習日を決める。以前はモンベエ  
(主兵衛、ジロウザエモン(治郎左衛門)ともいう)の自宅で頭がためを行っ  
ていたが、舞楽堂が建てられてからは舞楽堂で行っている。モン  
ベエ家は春日神社の氏子総代であり、春日神社の下に住んでいた  
こともあつて、舞楽堂が出来る前には、道具の管理なども行っ  
ていた。

頭がためは、以前は毎年六月二十日に行っていたが、現在では  
七月一日に行っている。また、七月一日に都合がつかない場合に  
は、七月一日に近い六月末の土曜日もしくは七月第一土曜日に行  
われることもある。頭がためが終わってから番楽の練習がはじま  
る。練習は八月十一日までの週二日、十九時三十分～二十一時  
三十分頃まで舞楽堂で行う。この期間集中的に練習をするが、番  
楽披露の要請があった時などは頭がための日より前に演じるこ  
ともある。また、全員必ず集まるといふわけではなく、その日集  
まった人々が演じられるものから練習するといったように、練習  
方法に特に決まりはない。

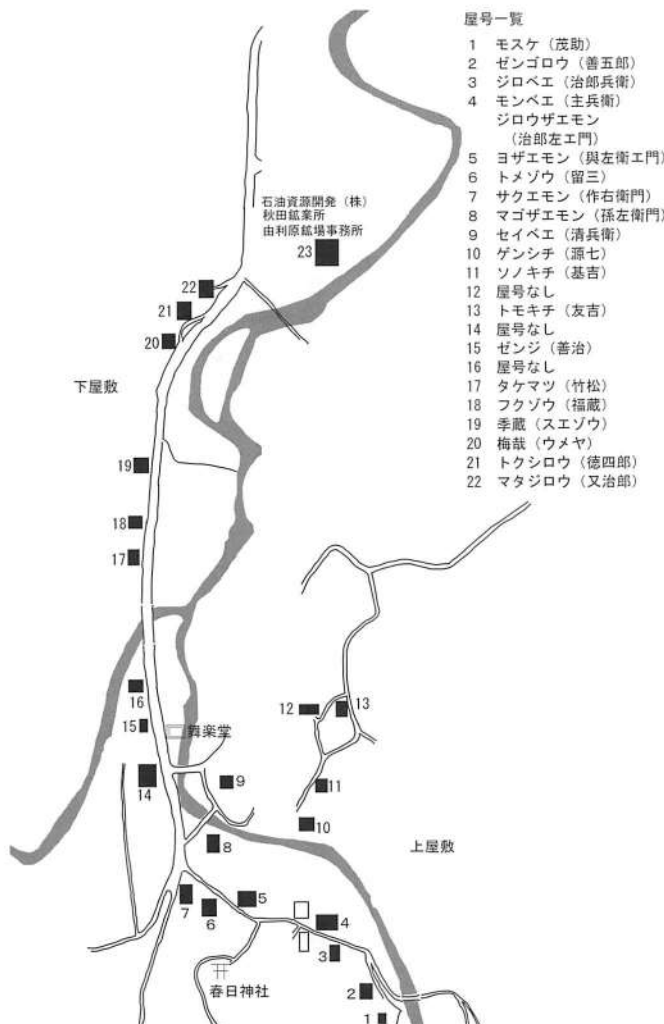


図1 悪魔払い巡行経路(2015年9月12日)

(2) 番楽を披露する日

番楽をほぼ全演目通して演じるのは毎年盆の八  
月十六日と、春日神社の宵宮である八月二十六日  
の二回であり、舞楽堂が建てられる前は春日神社  
の境内で演じられていた。

番楽を演じる当日は、舞楽堂から、太鼓一人、  
笛二人、鉦(手平鉦)一人、獅子頭をもつ一人一  
人が先頭になり、出演者と保存会の関係者がその後  
に続いて、通り唄を歌いながら春日神社に向かう。  
神社に到着すると、まず御神酒をあげ、獅子頭を  
社殿の中央に境内に向かって置く。拝礼の後境内  
で獅子舞を奉納する。その後通り唄を歌いながら舞楽堂へ戻る。番楽を舞う



写真4 通り

前に舞台までの道を、通り拍子を演奏しながら皆で歩くことを「通り」という。この通りは、八月十六日、二十六日いずれでも行われる（写真4）。

### (3) 門獅子（悪魔祓い）

門獅子とは獅子頭が集落内の各家々を廻り、獅子頭を奉納する行事で、悪魔祓いとも言われる。以前は番楽の公開日であった翌日の八月二十七日と二十八日に行われたが、現在は九月第二日曜に行われるようになった。

門獅子では、春日神社に参拝した後、通り拍子を奏でながら上屋敷地区から下屋敷地区に向かって各家をまわる。玄関先、もしくは座敷に上がり、獅子頭の歯を激しく鳴らして獅子舞を奉納する。中には番楽を希望する家もあり、その場合は座敷に上がってその時演じることが出来る演目を二〜三演目披露する（図1）。

門獅子は全戸まわるが、その前の年に亡くなった人がいる家や、宗教上の理由から希望しない家にはまわらないとされてきた。けれどここ数年は前年に亡くなった人がいる家もまわるようになった。以前は夜遅くまで集落をまわったと言うが、現在は昼頃から回り始め、夜の七時くらいには終了する。

### (4) 幕おさめ

以前幕おさめは九月二十日頃行っていたが、農作業を行う日が長くなったことや、旧由利町主催の「ゆりまつり」が十一月に開催され、そこで番楽を披露しなければならなかった関係から、現在では十二月第一土曜日に行われている。

この時は神社への参拝や番楽の奉納などはなく、屋敷担い手センターに集まって直会を行うのみである。昭和四十年（一九六五）ぐらいまで、幕おさめはモンベエの家で行っていたが、その後は担い手センターで行うことになった。一般的には、番楽は頭がためから幕おさめの期間のみ演じるものと

されるが、一時期、現在演じられなくなった演目の復活をするため、幕おさめ後に一日か二日、番楽の練習を行ったこともあった。

### (5) お獅子まわし

「お獅子まわし」という行事が平成十五年頃まで一月十五日の夜に行われていた。お獅子まわしは、小学校一年生から中学三年生までの男子が獅子頭を持って集落の各家をまわる行事であり、九月に行われる「門獅子」と同じく悪魔祓いの形を取る。まわる順も門獅子と同じく、上屋敷から下屋敷へまわった。ただ門獅子とちがいが、楽器は太鼓のみで、獅子頭を持つ人とおっぱとり、ほかに餅かつきという役割のみ決まっており、他の子供達は獅子頭の後について「お獅子まわしの唄」を唄いながら集落をまわった。この悪魔祓いは男の子の行事で、番楽とは直接の関係はない。男の子たちは小学校に入ればお獅子まわしができると楽しみにしていたが、子どもの数が少なくなっただことから、次第に行われなくなってしまった。

### (6) 師匠の弔い

家を新築した時に舞う獅子舞（柱がらみ）や、墓で獅子舞を舞うことは既に行われておらず、以前も行っていたかは不明である。ただ、言立本には「柱がらみ」があるため、行われていた可能性がある。番楽の師匠が亡くなった時には、師匠を供養する舞が舞われる。八月十三日の午後、亡くなった師匠の家に行き、獅子舞を舞った後、その師匠が得意としていた舞を舞って供養をしている。この行事についての呼び名は特になかった。

### (エ) 舞台・道具類など

#### (1) 上演する場所

現在、番楽は集落内の舞楽堂で演じられるが、舞楽堂の出来る前は、産土

神である春日神社の社殿で演じられていた。当初は春日神社の社殿で舞ったといわれているが、観客が入りきらないため、昭和三年頃に番楽の行われる時期だけ境内に仮屋を作り、そこで舞うようになった。仮屋は間口三間、奥行二間で、社殿に向かって建てられ、人々は社殿に席を設けて番楽を見たという。仮屋は毎年八月十四日に組み立てられ、八月二十六日から二十七日頃に解体した(写真5)。

しかしながら集落の高齢化がすすみ、人々が高台にあった春日神社に行くことが困難になったため、昭和四十年代頃から集落の集会所であった「屋敷担い手センター」の前に仮屋を作って舞うようになった。この「屋敷担い手センター」ははじめ現在とは異なる場所にあったが、昭和三十九年(一九六四)に現在の場所に移った。そして昭和五十四年に建物が改築されたが、昭和四十六年、屋敷番楽が県の無形文化財(後に無形民俗文化財)に指定されたことがきっかけとなり、昭和六十年に野外・

屋内に舞台のある「舞楽堂」が増設された。このことから屋敷担い手センターは全国でも珍しい集会所とされる。

(2) 番楽の舞台

現在番楽が演じ



写真6 舞楽堂舞台



写真7 演奏者



写真5 仮屋(写真提供:秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室)

られる舞楽堂の舞台は野外舞台が三六六cm×五三四cm、屋内舞台が二六八・五cm×五三〇cmで、仮屋の舞台よりやや大きめに作られている(写真6)。舞台の前後を七・三で分けるように番楽幕が張られ、舞台と楽屋とを区別している。演者は幕の後ろから幕をくぐって登場するほか、言立も幕後ろから語られるため、幕の後ろは六〇cm(屋内)から八〇cm(屋外)ほど空いており、人が待機できるようにになっている。

番楽が始まる前、舞台中央には太鼓の上に獅子頭が観客席に向かって置かれている。演奏者は舞台下手側に、観客側から舞台奥側に向かって、太鼓一人、笛二人、手平鉦一人の順に座る。演題は上手側に置かれる(写真7・図2)。

(3) 獅子頭

現在の獅子頭・屋敷番楽には二体の獅子頭がある。現在の獅子頭は、前の獅子頭を模して作られたもので、銘がないため製作年代は不明である。何度も補修をしており、昭和天皇の即位式のあった昭和三年(一九二八)には獅子幕が新調されているので、それ以前に作られたものであることが推察される。この獅子頭は、頭頂部に波打つような模様があり、目と鼻が大きく、髪は麻糸である。獅子幕は、隠居獅子の幕と同じく、丸い輪が描かれている。もともと固定した耳がついていたが、現在はなくなっており、一見耳のない獅子頭のように見える。これは、平成五年に獅子頭を補修した際に、耳の接合部を漆で隠したためである。寸法①16cm②13cm③12cm④25cm⑤8cm⑥21cm、目の大きさ①縦4cm×横8・5cm、鼻の穴の大きさ①縦3・2cm×横3・4cm、獅子幕①188cm×300cm、尾の長さ①170cm×40・5cm。

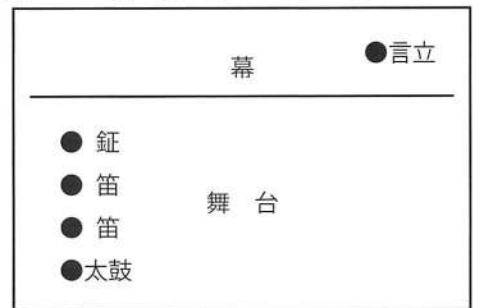


図2 舞台

隠居獅子…かつて屋敷番楽で使用されていた獅子頭であり、現在は隠居獅子として舞楽堂にまつられている。漆が剥がれ、下顎が割れている部分が紐で補修されており、激しく歯打ちが行われたことが推察される。目と鼻が大きく、頭頂部に波うつような模様がある。耳は固定されており、髪は麻糸である(写真8)。獅子頭の上顎の部分に墨書があり、



写真8 隠居獅子

「□□郎 清助 吉沢村のしゝのいもと

□寛政四 壬子年 行年 三拾

大工 与四郎 作 喜作 与兵衛 平助 圓兵衛 市内」

と書かれている。文字が消えかかっていて所々不明な部分も多いが、寛政四年(一七九二)に作られた、吉沢村の妹獅子であることが分かる(写真9)。屋敷では、隠居獅子が女獅子である

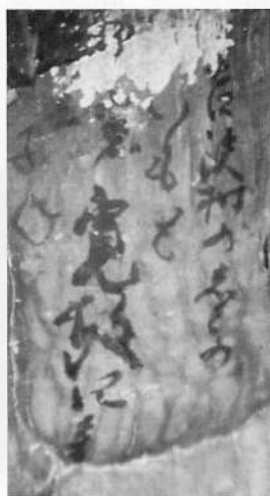


写真9 隠居獅子赤外線写真

ることが伝承されており、この墨書からも女獅子であったことが確認できる。吉沢集落との関係については、残念ながら吉沢が明治時代に火災に遭い、文書や獅子頭などが焼失してしまったため詳細を確認することができなかった。寸法…①18cm②15cm③13・5cm④26cm⑤8cm⑥21・2cm、目の大きさ…縦5・1cm×横9・5cm、鼻の穴の大きさ…縦3・6cm×横3・4cm、獅子幕…98cm×186cm、尾の長さ…65cm×12cm。

(4)面

現在屋敷集落には一三の面が残されている。演目の中で面が使われるのは

六演目であり、使用されていない面もある。

面①(写真10)…現在「餅つき」「蔵折り」に使用。左頬の部分に欠損があるものの、厚みがあつて状態が良い。目に白色が残っているが、顔も白く彩色されていたと思われる。寸法…天地16・5cm×幅13cm。

面②(写真11)…現在は使用されず。同じく女面であるが、①よりも一回り大きく作られている。右頭部の木面がめくれあがつている部分はあるものの、他に欠損はない。髪の毛の部分に赤い色が残っている。面の裏、左上部に「わかこ」と墨書が確認される。「若子」は現在行われていないが、二冊の言立本、いずれにも確認される演目であるため、「若子」に使用された面であると思われる。寸法…天地18・8cm×幅14cm。

面③(写真12)…現在「蔵折り」に使用。この面は「爺翁」の面と言われているもので、顔色が青黒く、顎髭に麻が使用されている。面の裏、左上部に、二文字、墨書が確認できるが判読できず。寸法…天地17・5cm×幅14・8cm。

面④(写真13)…現在「橋引き」の太郎面として使用。道化面とされる。目や鼻がアンバランスに配置され、口がとがつており、顔中にシワが刻まれている。額のコブから鼻にかけては、魚をかたどっているといわれる。寸法…天地20・6cm×幅13・6cm。

面⑤(写真14)…現在「餅つき」に使用。④と同じく道化面である。この面は昭和三十年か四十年頃に、由利本荘市鳥海町の人が作ったものをもらい受けたものであり、もともと屋敷の面ではない。眉が太く描かれ、左頬の色が剥げ落ちている。寸法…天地20cm×幅14cm。

面⑥(写真15)…現在「蔵折り」「可笑」に使用。顔全体が赤く塗られており、額の色に剥げかかった部分がある。右側の額から右目脇、右口下にかけて割れており、針金で補修している。この面は以前「餅つき」にも使用されていたが、顔つきから、めでたい面に見えないとのことで、現在は「餅つき」には使用されていない。寸法…天地18・5cm×幅14cm。





面⑦（写真16）…現在「翁」に使用。白色尉の面。目が垂れ下がり、全体に皺が刻まれている。唇が赤く、四本の歯には黒く彩色された跡が確認できる。左額から左目脇、左頬にかけて割れており、白い紐で補修している。また、鼻の下と顎には、髯が麻でつけられている。眉にも植毛の跡が確認できる。寸法…天地18・8cm×幅14・5cm、顎髭の長さ…最大33cm。

面⑧（写真17）…現在「三番叟」に使用。黒色尉の面。右額から右目上部にかけてと、左額から左頬にかけて割れがあり、左部分は紐で補修している。顎髭が麻でつけられている。面の裏、左上部に墨書があり、「さんばそ」と書かれているように読める。寸法…天地18・5cm×幅16cm。

面⑨（写真18）…現在は使用せず。⑧と同じく黒色尉の面で、眉毛と顎髭が麻糸でつけられている。この面は平成十七年に潟上市在住の細井氏に製作してもらったもので、桐の木で作られている。面箱もあり、蓋の裏面に「三番叟 H17 5 完潟上市細井」と書かれている。寸法…天地19cm×幅14cm。

面⑩（写真19）…現在は使用せず。曾我兄弟の面と伝えられている。顔全体が白く塗られ、唇が赤く、頬と顎に髯が黒く描かれる。面の裏、左上部に墨書があり、「五郎」と書かれているように読める。寸法…天地19cm×幅15cm。

面⑪（写真20）…現在は使用せず。この面も曾我兄弟に使用したものと伝えられている。⑩の面よりも目が細く、つり上がって描かれている。頬の髯が黒く描かれているが、顎は色がはげ落ちていたため、顎髭があつたかどうかは分からない。面の裏、左上部に墨書があり、「十郎」と書かれているように読める。寸法…天地18・3cm×幅14cm。

面⑫（写真21）…現在「蔵折り」に使用。顔全体に赤く塗られており、するどい牙を持つ。寸法…天地19cm×幅14cm。

面⑬（写真22）…現在は使用せず。面⑫と対をなす鬼面とされる。口の両側が大きく丸く削られており、恐らくここに牙がついていたと思われる。寸法…天地17cm×幅14cm。

面入箱…面を入れる専用の蓋つきの木箱だったが、現在は蓋が行方不明になっている。蓋の表面に「昭和17年9月13日」と書かれていたという。寸法…45cm×26cm×25cm。

この他に新たに製作した番楽に使用しない女面がある。寸法…天地21cm×幅13cm。

#### (5) 幕

屋敷番楽には現在使用している幕も含め、四種類の幕がある。図柄はいずれも同じで、上部には、「志ん上（進上） ひみき」と書かれ、幕いっばいに源平合戦の一部分が描かれる。左下には幕を作った当時の師匠と門弟の名前が染められている。

幕①…現在残されている幕のうち、最も古い幕には明治二十五年（一八九二）九月吉日と書かれており、本荘市（現由利本荘市）の染め師が製作した

ものである。この幕は現在には使用していない(写真23)。寸法・縦204cm×横450cm。

幕②・昭和三年(一九二八)十一月吉日に秋田市の染め師が製作した幕である。幕左下に「御大典記念」と描かれている。寸法・縦231cm×横522cm。

幕③・現在舞楽堂で公演を行う時に使用する幕。昭和五十六年(一九八一)十二月、秋田県無形文化財指定十周年を記念して作られたもので、旧本荘市の喜助堂で製作された。図柄はそれまでの幕と同じであるが、これまでの模様よりも粗く染め

ている。寸法・縦238cm×横556cm。

幕④・最も新しい幕で、秋田県指定無形文化財三十周年を記念して平成十三年十二月に由利本荘市の喜助堂で作られた。この幕は普段は使わないが、大きな舞台で番楽を演じる時に使用される。寸法・縦238・5cm×横739cm。

この他、昭和四十八年(一九七三)八月に製作された、番楽幕の前上方に下げる横幕がある。寸法・縦67cm×横619cm。

(6) 楽器

屋敷番楽では二つの太鼓が残されている。いずれも締太鼓で、比較的胴が長く、「大拍子」または「大太鼓」と呼ばれるものである。胴の両側に革面をあて、麻を依った紐で胴と革面とを固定している。胴はケヤキ、革面には馬革が用いられる。

太鼓①・現在使用している太鼓で平成七年(一九九五)九月、もともとあった太鼓を横して作られたもの。漆で黒塗りされた胴部分に「平成七年九月屋敷番楽保存会」と書かれている。山形県酒田市にある竹中楽器店で製作さ



写真23 幕①

れた。寸法・革面直径46cm×胴部長さ42cm。

太鼓②・屋敷に古くから伝わる締太鼓で、胴部に漆で黒塗りされている。現在使用されていないが、胴部内側に墨書があり、文化十四年(二八一七)七月に平沢(現にかほ市)の吉田屋

表4 太鼓②胴内部墨書

文化十四 丁丑 丑七月朔日 貳貫七拾文 平沢 吉田屋
(反対側に) 明治十年六月 張替仕候 本庄片町 吉田孫作 二代目 繁五カ?郎
(明治十年の墨書に向かい合うように) 昭和七年 旧十月吉日 代金 六円 三代目 吉田孫作

で作られたことや、その後明治十年(二八七七)と昭和七年(一九三二)に革面の張替えが行われたことが分かる(表4)。寸法・革面直径47cm×胴部長さ44cm。

革面・革面は太鼓につけられているものが一對、使用していない革面が一對残されている。一番新しいものは平成九年(一九九七)に張替えたもので、「平成九年十月十五日 両面六万円也 消費税三千元 会長藤谷房男」とある。寸法・革面直径46・5(内側36)cm。

現在使われていない革面のうち、一枚は片側に「昭37年張替 三千元」、裏側に鉛筆書きで「昭和三十七年九月十五日 参千円也」と書かれている。寸法・革面直径46・5(内側36)cm。

もう一枚は鉛筆書きで「熊谷竹松 十一月迄 一、七〇〇」とあり、裏面に「千七百円 昭23年張替」とある。寸法・革面直径47(内側36)cm。バチ・太鼓のバチは二組残されており、太さは1cm、長さは五〇cmから六〇cmある。テープを巻いているものはナラ材で、巻いていないものはサクラ材で作られていると伝えられている。

笛・屋敷番楽では篠笛を用いている。笛は保存会で作られるため、長さや指

孔の間隔も一樣ではない。笛の材料の竹は屋敷や周辺集落に生えている、節と節の間が四〇cmぐらいいあるものを使う。昭和三十年頃にはにかほ市象潟町本郷に生えていた竹を使って作ったこともあったという。

鉦（手平鉦）…屋敷番楽では「鉦」と呼んでいる。現在三種類の手平鉦があり、鉄と銅の合金で作られる。新しい鉦は昭和四十年代に作ったが、音が響きすぎるために古い鉦と一組にして使っている。錫杖や手平鉦は由利本荘市万願寺や油小路の鍛冶屋に頼んで作ってもらった。

鉦①…直径13・1cm×内径8・9cm、鉦②…直径13cm×内径8・1cm。

鉦③…直径12・6cm×内径8・6cm、鉦④…直径13cm×内径8・5cm。

(7)かぶり物

鳥兜…「鳥舞」と「腰小弓」に用いられ、雌雄一對の兜が使われる。四対の鳥兜があり、兜の右面上方に月光、左面上方に日光がつけられている。鳥兜のうち、新しいものは旧仙北町（現大仙市）の鈴木太鼓店で製作された。

烏帽子…屋敷番楽には三種類の烏帽子がある。赤と黒色の、頭頂部が細くつながっているものは「三番叟」に使う。全体が黒く幅が広いもので、烏帽子の上部にある前に突きだした部分（まねき）が額の上にくるものを「翁」や「蔵折り」に、まねきが後頭部の上にくるものを「先番楽」に用いている（写真24）。

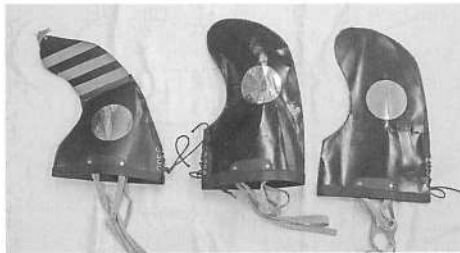


写真24 烏烏帽子

しゃがま…頭の上に被るかつらのようなもので、一般には「さい」とか「ざんぎり」などと呼ばれる。屋敷番楽では十演目で用いられる。黒いしゃがまといしゃがまがあり、黒いしゃがまは「弁慶」「三人立」「神々舞」「志賀団七」「治神楽」「熊谷」の演目に用い、「餅搗き」と「可笑」では股間につ

ける。白いしゃがまは「弁慶」の牛若丸、「矢嶋小弓」「忍」の演目に用いる。しゃがまの材料は布と馬の毛で、保存会の手作りである。以前は各家で農耕馬を飼っており、馬の尻尾の毛を抜いて作った話も聞かれたが、昭和六十三年に作ったしゃがまは、湯沢市の筆職人から馬の毛を購入して製作した。

(8)衣装

番楽に使われる衣装は、以前は獅子舞連中の家の女性達が作っていたが、現在では仕立屋に頼んでいる。番楽を演じる時には、襦袢をたすきで締め、縦縞の袴を穿き、腰に帯を締め、黒足袋をはくのが基本の姿となっている（写真25）。



写真25 衣装

また、保存会で着る揃いの浴衣は平成に入ってから作られた。扇紋が全面に染められているが、紋様に特に意味はないという。

鎧…「弁慶」「志賀団七」「矢嶋小弓」「熊谷」「忍」に用いる。赤と黒の鎧があり、赤は若武者、黒は年長の武者が着用する。赤い鎧の胴部分には「御所車」、黒い鎧の胴部分には「丸に扇」がつけられているが、紋の由来については不明である。

陣羽織…「三番叟」「志賀団七」に用い、鎧の上から着用する。背中に「丸に三つ引き」の紋がある。陣羽織の中には刺し子が刺されたものがあり、貴重である。

狩衣…「翁」「蔵折り」の翁翁が身につけるもので、平成五年に純白の綿で作られた。

(9)持ち物など

番楽を演じる時に持つものや、道具などさまざまあるが、ここでは代表的なもののみ紹介する。

錫杖・「鳥舞」「矢島小弓」「三番叟」「神々舞」に用いる。屋敷では「鈴」と呼んでおり、振りながら舞う。桐の柄に金属の輪がそれぞれ九個ついている。寸法・長さ25cm。

長刀・刀・鉞・鎖鎌・長刀は「志賀団七」や「弁慶」で使用され、スギ材で作られている。寸法・長さ103cm。

刀は武士舞で使用され、現在では「志賀団七」「弁慶」「矢島小弓」「神舞」「治神楽」「熊谷」「忍」に使用される。寸法・長さ53cm。

鎖鎌は杉で作られ、「志賀団七」に使用される。寸法・鎌の柄27cm、鎖の長さ103cm。

鉞・「蕨折り」に使用される。寸法・長さ33cm、刃渡り7cm。

弓・「矢島小弓」「腰小弓」に使用される。昭和六十年に保存会で作られた竹製の弓である。寸法・弦の長さ48cm、弓の長さ55cm。

杖・杵・棒など

杖は「蕨折り」の爺翁に使用される。藤製で保存会で製作した。寸法・長さ108cm。

杵は「三人立」や「餅搗き」に使用され、現在八本ある。ラワンと桐製。寸法・長さ30cm。

杵は「空白舞」に使用される。二本一組で四組ある。現在使用していない杵はイタヤカエデで、現在使用している杵はナラで作られている。持ちやすいように杵の真ん中を細くしている。寸法・長さ89cm（最大）。

白・「空白舞」に使用される。サクエモン（作右衛門）家から寄贈されたものであるが、いつ頃作られたものかは不明である。寸法・高さ44cm×直径70cm。

弁当入れ・「こだし」と呼んでいるもので、「橋引き」に使用される。太平洋

戦争後、保存会で製作されたと伝えられる。寸法・20cm×28cm。

手桶・杉材の桶で、「餅搗き」に使用される。桶の底部に「50年 釜が台 熊谷恒吉寄贈」とある。桶を寄贈した人物は釜ヶ台に移住した屋敷出身の人であるが、番楽を演じることはなかったという。寸法・直径28・5cm×高さ37cm。

人形・「餅搗き」に使用され、保存会が昭和四十年代に製作した。「ぼぼこ」と呼んで保存会で大切にしているものである。寸法・身長78cm。

(七) 屋敷番楽の広がり

(1) 屋敷番楽からの伝承

屋敷番楽は、しばしば他集落へ番楽を伝えたことが伝承として残されている。屋敷番楽から伝わったとされる集落は、黒沢、沢口（旧由利町）、土谷、雪車町（旧本荘市）、長坂（旧大内町）とされる。ほか、鮎瀬（旧本荘市）も屋敷番楽との関わりがあるとされる。このうち、雪車町には文久三年（一八六三）に、土谷には明治十年（一八七七）、黒沢には明治三十九年（一九〇六）頃番楽が伝わったとされている。

各集落に伝わる言立や獅子頭、神社の奉納額などから、番楽が伝わった時代を整理したい。土谷には、屋敷から伝わった「本皆流獅子舞秘伝之大事」が残されている（写真26）。本文は、本海獅子舞番楽八木山講中（旧鳥海町）にある「本海流獅子舞秘伝大事」と内容がほぼ同じで、末尾に、「秋田県由利郡屋敷村 佐藤平右工門 明治十巳八月 土屋村 若者中江」と書かれていることから、明治十年に屋敷から土谷へ番楽が伝わったことがこの秘伝書から確

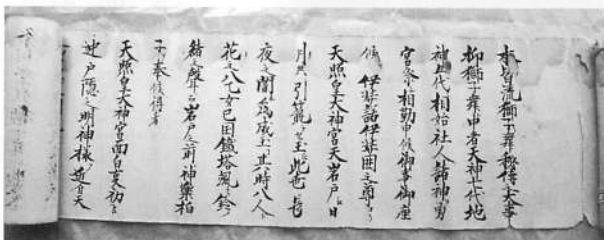


写真26 本皆流獅子舞秘伝之大事



表6 雪車町番楽言立本

年代不明本	昭和十年六月言立本	昭和四十七年本荘観桜会上演演目
翁	翁	獅子舞
幕出蕨折	三番(そう)	神舞
曾我	橋挽	先番楽
三番叟	鶏舞	三番叟
橋引舞	地神舞	御神楽
とりまひ	八澤木獅子	一人剣
地神舞歌	熊谷二郎直実	信夫太郎
若子舞	蕨折	高立舞
五拍子	信夫太郎	小弓ノ裏?
鈴木三郎茂(重)家	団七(志賀団七)	木曾
重家高館合戦之事	木曾	団七(志賀団七)
熊谷治郎一ノ谷合戦之事	かねまき	鳥舞
義経公吾妻下り	弁慶	根子切
熊谷治郎一谷合戦之事(重複)		
矢島		
裏矢嶋		
弁慶舞		
忍太郎景時		
機織舞		
機織しゃもん		
神歌		



写真27 雪車町の獅子頭

認できる。佐藤平右工門は番楽の師匠をつとめた人物であったという。土谷には他にも祝詞や、演目について書かれたらしい紙の断片が伝わっているほか、明治二十年の銘のある獅子頭や、明治二十一年七月の番楽幕、面などが残されており、獅子舞や番楽が行われていたことが分かる。雪車町では笛の吹き手がおらず、残念ながら休止しているが、言立本や番楽幕、面が九面、「大正十二年(一九二二)」と染められた番楽幕、太鼓や手平鉦、ケンサキなどが残されている(表6)。雪車町には獅子頭が三体残されており、上顎に延宝四年(一六七六)と刻まれた獅子頭もある。獅子頭三

表7 鮎瀬獅子舞言立内容

年代不明言立本・台詞から演目を推察	昭和二十三年八月言立本
三番叟	三番叟
蕨折り	志賀団七
しのぶ	キソウノマイ(木曾か?)
木曾	根子切り舞
志賀団七	鳥舞
弁慶	ツルギ舞
地神舞(神々舞)	鳥舞
古弓舞	

体のうち、番楽で使用されたものもつとも小ぶりのもので、後頭部に「嘉永三庚戌□□□□(□は不明字)宥仙」と墨書がある(写真27)。この墨書から雪車町には、伝承されている文久三年より前の嘉永三年(一八五〇)に獅子舞が伝わっていた可能性も考えられる。鮎瀬にも、獅子頭や番楽幕、太鼓や笛、ケンサキ、面が六面保管されている(表7)。集落内の白山神社には、慶応二年(一八六六)に集落の獅子舞連中が奉納した額がおさめられており、慶応年間には鮎瀬に番楽が伝えられていたことが分かる。

黒沢には明治二十七年(一八九四)に獅子舞連中が太鼓を奉納した額があるため、この頃には番楽が伝わっていたことが分かる。黒沢では新山神社の祭日やお盆の頃、秋の大川大明神の祭日などに悪魔祓いを行っており、現在も新山神社の祭日に悪魔祓いを行っている。また、終戦後までは新築の家で獅子舞いを舞う「家祓い」も行われていたという。

他の集落では、年代を特定できるものを見いだせなかったが、屋敷番楽と何らかのかかわりがあるとされる集落には、江戸時代の終わりから明治二十〜三十年代までに番楽が伝わっていたことが確認できる。番楽の伝承には、屋敷番楽の中興の祖と言われる巴源七が指導にあたったと言われている。巴源七は葺師であったため、夜に他集落へ指導に行ったという<sup>16)</sup>。明治二十五年の番楽幕の中に師匠として巴源七の名があり、明治中頃に活躍していた人であったと思われる。巴源七がどの地域に

番楽を伝承したか定かではないが、巴源七のみならず、番楽の師匠達が積極的に番楽を近隣集落へ伝えようとしていたと思われる(図3)。

また屋敷では番楽を他地域に指導するだけでなく、明治時代頃から他集落へ出向いて番楽を演じたことも伝えられている。明治末期から大正の始め頃には近隣の西滝沢や石沢方面(旧本荘市)から、飛島(山形県)へ行ったという話がある。

昭和になってからは、旧仁賀保町の小出村、百目木、立居地、樋の口や旧由利町の黒沢、二太子、堰口、中畑、南福田、奉行免、前郷などに行つて出演をしたという。

このことから、屋敷番楽は地域の中核的役割を担っており、番楽の伝承について一助を担っていたといえるだろう<sup>(17)</sup>。

(2)戦争と番楽存続の取り組み

屋敷番楽は、早くから他地域へ番楽の指導や出演を行っていたと同時に、後継者育成にも積極的に取り組んできた。

戦時中番楽の存続が危ぶまれ、昭和二十年にはとうとう一時中断を余儀な



図3 屋敷から他集落へ番楽の広がり

くされたという<sup>(18)</sup>。この危機を救ったのが昭和十七年に集落へ戻ってきた一人の若者で、集落をまとめ、番楽の再興をはかったという。戦争のため十演目まで演目を減らさざるを得なかったものの、昭和二十二年頃から再び番楽が演じられるようになった。

昭和の終わり頃まで行われていた正月十五日の子ども「お獅子まわし」

表5 お獅子まわしの唄

一	きたれやともよ <sup>(ママ)</sup> うちつれて 今日ゆかいに さんぼせん 日はたたかく くも晴れて けいしき すぐれし よしのべに
二	空気もきよきのいれて しょうか歌はもろとも いそげば花 あるところまで いそげば草つむ ところまで
三	手帳 えんぴつとりいだし 科学のけいこもろとも われゆくさきに こちよく おどるは村らのまつのかげ ドンドンドン
四	村らはつちからまことから ころ高まる ぞうさんは国にのめぐみだあ 土か?とりいきいて はたらきいのこう はたらいて ふやせへみずほの たかあらあぐうらあ
五	村らはおのからこだまから あけてはなさく ぞうさんは 国にの光りがあ日のまる あおうぎ はたらきいぬこうはたらいて ふやせへ みずほの くにいのとおみ

には、戦時中に後継者を育成しようとした要素がかいま見られる。集落をまわるときの「お獅子まわしの唄」は長年口伝で伝えられてきたが、子どもの減少で存続が危ぶまれるようになった昭和四十九年(一九七四)頃に書き写された歌詞が残されている(表5・第六章楽譜1「お獅子まわしの唄参照」)。歌詞は五番まであるが、三番で一度途切れ、太鼓の音が入る。一番から三番までの歌詞は明治三十四年(一九〇一)大和田建樹作詞、多梅稚作曲の「散歩唱歌」のものであり、四番と五番の歌詞は昭和十七年(一九四二)農山漁村文化協会作詞、古関裕而作曲の「村は土から」をもとにしたものであることが分かった<sup>(19)</sup>。この「お獅子まわしの唄」がいつから歌われていたかは分からないが、昭和七年生まれの人が子どもの頃には行われていたことと、四番以降の歌詞が昭和十七年の曲であることからすると、以前からお獅子まわしが行われており、昭和十七年以降に四番以降が新たに付け加えられたと

考えることができるだろう。

四番以降は三番までと比べると、戦争中の世相を反映した歌詞が随所に見られる。これは戦時中でもお獅子まわしが続けられるようにした配慮ではなかっただろうか。当時は子どもが獅子舞連中に入ることは出来なかったが、「お獅子まわし」を行うことによつて、番楽の後継者を育成したいという意図があったことも推測される。

### (3) 保存会結成と後継者育成

屋敷番楽は昭和四十六年（一九七一）、秋田県指定無形文化財に指定された際、後継者を育成することが指定の条件とされた。そのため、この年から高校生以上も保存会に入れるようになり、昭和五十年代になると小学生の入会も許可されるようになった。現在は小学校五年生になると門弟として保存会へ入ることができる。しかしながら、保存会は男性のみで組織されており、現在の段階で女性の加入はない。

また、屋敷番楽は県内外で行われる民俗芸能の公演にも積極的に出演していると同時に、映像記録も作成している。

平成二十年には東京の映像制作会社により、屋敷番楽全演目を収録したDVD「屋敷番楽」と、屋敷集落の一年を追ったドキュメンタリー映画「長靴をはいた獅子たち」が平成二十三年に作られた。この映画をきっかけとして、番楽二〇演目をDVD各一枚におさめたもの、太鼓や囃子、笛の演奏の仕方記録したもの、番楽の師匠から昔の様子の聞き取りをおさめたDVD計二二枚が作られた。このDVDは教材的な役割もあり、屋敷番楽を習う人達はこのDVDを参考にすることが多いという。

このように、屋敷番楽は古くから番楽の普及と後継者育成にも早くから力を入れていることが分かる。集落の人々は番楽を継承することに積極的であり、今後も新たな取り組みを行って行くと思われる。

### (註)

- (1) 『由利町屋敷「ふる里は語る」』秋田県由利郡由利町屋敷部落、一九九八年、6～7頁。
- (2) 『由利の民俗 下』由利町教育委員会、二〇〇〇年、594～595頁。
- (3) 言立の内容については、『由利町文化財調査報告書第15集 秋田県指定無形民俗文化財 屋敷番楽調査報告書 一言立編』由利町教育委員会二〇〇一年をもとにした。
- (4) 県指定申請書ならびに明治大学大久間ゼミナール『屋敷番楽の調査』一九八四年、319～320頁による。
- (5) 『由利の民俗 下』由利町教育委員会、二〇〇〇年、601頁。
- (6) 今回行った聞き取り調査からの情報。
- (7) 註(5) 596頁。
- (8) 註(1) 48頁。
- (9) 註(1) 48頁。
- (10) 註(1) 48～49頁。
- (11) 註(1) 49頁。
- (12) 『本海番楽―鳥海山麓に伝わる修験の舞―』鳥海町教育委員会編、二〇〇〇年、182頁。
- (13) 面から道具までの記述については、『由利町文化財調査報告書第13集 秋田県指定無形民俗文化財 屋敷番楽調査報告書Ⅰ―諸道具編―』由利町教育委員会、二〇〇〇年と聞き取り調査とをもとにした。
- (14) 註(5) 595頁。
- (15) 註(12) 112頁。
- (16) 註(5) 595頁。
- (17) 註(1) 46頁。
- (18) 註(1) 50頁。
- (19) 古閑裕而記念館HPより。http://www.kosekyuji-kinenkan.jp/sakkyoku/50-m.html

(丸谷仁美)

## 第三節 濁川獅子舞

## (一) 濁川集落の概要

濁川集落は鳥海山から流れる子吉川の支流荒沢川に沿って形成された旧矢島町荒沢村に属する地域である。荒沢村は旧矢島町の南西部に位置し、盆地部には荒沢・針ヶ岡・矢越の集落があり、熊の子沢・檜沢・濁川の集落は鳥海山麓を開墾した地で、荒沢川に沿って集落を成している。

宝暦六年(一七五六)の「御領分中覚書」には、荒沢村は本田高三四七石八斗三八合、新田高四〇石三斗一升七合、戸数七二戸、人数三〇七人とあり、明治初年(一八六八)には戸数八九戸、人数四八〇人、馬一七六頭で、馬三〇頭、鶏卵五千粒、薪五〇〇張を矢島町へ出している(『羽後国由利郡村誌』)。さらに、明治二十二年になると世帯数二二九戸、人口六二〇人と戸数・人口とも増加している。

荒沢村の濁川集落は矢島町の中心部から約5kmに位置し、標高二〇〇mから三〇〇mの木境から傾斜面に点在する集落で、昭和四十年代は二四戸あって、お盆の悪魔払いも十三日と十四日の二日間に行っていたが、現在は一一戸の小さな集落である。職業は第二種兼業農家が多いが、現在は農協職員・会社員など若者たちを中心にサラリーマン世帯も多い。

現在、濁川周辺の近くには鳥海高原花立牧場公園があり、花立牧場・高原の駅花立クリーンハイツ・子どもの国・ラクビー場・宿泊センターなどが整備され、冬季には鳥海高原矢島スキー場もあって大自然に囲まれた由利高原の観光地となっている。また、近くの矢越の根城館跡には、約四五〇年前に大井氏が創建したと伝えられる県指定有形文化財の八幡神社がある。

さらに、濁川には鳥海山登山道の二合目に木境大物忌神社があり(写真1)、その山道を登ると開山神社がある。木境大物忌神社は鳥海山の遥拝所

であるとともに木境周辺は山伏長根とも呼ばれた矢島修験者たちの修行地でもあった。鳥海修験は薬師如来を本地とし、大物忌神を垂迹とする神仏習合で京都の醍醐三宝院に属する当山派であった。

開山神社は嘉祥三年(八五〇)に美濃国可児郡土田村から来た比良衛・多良衛兄弟が鳥海山の矢島口山道を開き、永世荒沢に住すと同神社の縁起に記されていることから荒沢の土田姓の多くは、その末裔とも言われている。

## (二) 濁川獅子舞の名称等と上演行事

集落内では、長年「濁川獅子舞」と呼ばれてきたが、近年は本海番楽の關係で「濁川獅子舞番楽」とも称している。この獅子舞は矢島町荒沢字濁川の地で伝承され、旧荒沢村に属する。荒沢村は本海番楽を伝えた本海上人が晩年に住み、没した村と伝えられ、番楽の盛んな村であった。

集落内での上演行事は毎年元日から始まって矢島神明社の八朔祭りまで幕納めとしている。元旦と八月十三日のお盆には集落内全戸を廻って悪魔払いをし、五穀豊穰・無病息災・家内安全等を祈願している。

毎年七月八日には木境大物忌神社の春の虫除け祭りで神舞・奉納獅子を舞い、引き続き、開山神社においても神舞・獅子舞を奉納して五穀豊穰・無病息災、そして鳥海山登山の安全を祈願している。

また、九月の第二土曜・日曜日に実施している矢島神明社の八朔祭りから依頼され、宵宮では拜殿で神舞・奉納獅子を舞い、御神輿の渡御と共に巡行している。



写真1 木境大物忌神社



翌日の祭例にも御神輿渡御に加わり、獅子とともに丁内を巡行しながら五穀豊穡・無病息災・家内安全を祈願している。

### (三) 濁川獅子舞の由来と歴史

濁川獅子舞は寛永年間（一六二四～一六二九）に真言宗の京都醍醐寺三宝院系の当山派に属する修験者の本海行人が直接伝授したのもとも、荒沢獅子舞から伝えられたものとも言われるが定かではない。

荒沢獅子舞は本田安次氏が昭和初期に矢島町・鳥海町などを調査され、昭和十七年（一九四二）発行の『山伏神楽・番楽』（井場書店発行）に「知られている限りでは、右の生駒氏の御殿に参向して奉納した御用獅子というのが三頭あった。即ち御用頭と名付けられたのが荒沢の獅子、二の獅子が興屋のもの、三の獅子が二階のものであった。これら三頭の獅子は、維新前迄、毎年盆の十四日に殿中上がった。」と記され、荒沢の獅子頭は御用一番獅子で頭頂に生駒氏の家紋である半車を抱えている。また、獅子頭を「八幡権現」とも呼び、舞を根城八幡神社の氏子がつとめてきたという由緒ある獅子舞であった。

しかし、昭和十年代後半に荒沢獅子舞が消滅してしまったことから、矢島神明社の八朔祭りの奉納舞は坂之下獅子舞へと受け継がれ、そして濁川獅子舞が引き継いで現在に至っている。

ところで、濁川獅子舞の由来の根拠となる資料として、古い幕に「文政十丁亥（一八二七）十月二日」と記されているのが最も古く、次に、火災時に焼失から免れた「獅子舞根本記」の末尾に「維時、元治



写真2 獅子舞根本記（右：表紙、左：末尾）

元甲子星（一八六四）仲秋日 写書之」とあるのが、年代を示す古い資料である（写真2）。

この二つの資料以前のものはなく、由来の詳細を知る手がかりは今のところない。近代に入ると、明治三十七年（一九〇四）に集落の入口右側に獅子舞の師であった高橋長吉を顕彰して建立された「獅子舞翁碑」（写真3）や明治四十二年旧七月十九日と書かれている道具入れ箱がある。

また、先にも記したが、昭和十年代に荒沢獅子舞が消滅すると荒沢に代わって多くの依頼があったことが矢島神明社の祭典記録等にあり、獅子舞の出番が多くなり、とても盛んであったことがうかがえる。

### (四) 濁川獅子舞の組織

明治期には濁川獅子舞の組織名を「濁川舞講若者」と称していたが、大正期以降になると「濁川青年神楽講中」と称し、その後「濁川獅子舞講中」として継承してきたが、平成十四年に獅子舞の番楽幕や道具類が盗難に遭ってから翌年四月に濁川部落総代に保存会長を依頼し、「濁川獅子舞保存会」とした。保存会の運営費も集落から補助金が出るようになり、集落全体で保存継承に努めている。

保存会への参加は、小さな集落で共同体の意識が強かったことから家柄や年齢に関係なく、本人の意思で加入できたが、近年は獅子舞を演じるための最小人数を確保するため、保存会の子どもや孫にも働きかけている。

会員は高橋安男会長を先頭に高橋十五郎・村上正・高橋由一・高橋貴夫・高橋輝の六人の構成メンバーで、舞を演じるには少ない人数であるが、高橋



写真3 獅子舞翁碑

家は親・子・孫の三代で演じており、もう一人の高橋家も親族であることから会員相互の信頼と結束は固いものがある。

現在の保存会の拠点は濁川会館であるが、様々な行事へ出かけて行く時は、集落内にある氏神・山之神社で、必ず舞を奉納してから出かける。

また、これまでは講中で獅子宿を当番制にして、各講員の家に一年間現役の獅子頭を安置し、獅子舞がある時は獅子宿で舞ってから出発した。例え獅子宿の引き継ぎの時でも隣の家へ移動する場合は、獅子頭・幕採り・笛・手平鉦・太鼓の順に行列を組んで、小路渡りのお囃子で移動するのが慣例とされていた。しかし、盗難事件があつてからは集落の会館に安置するようになり、現在は濁川会館が活動の拠点となっている。また、貴重な「獅子舞根本記」や音楽面等は矢島郷土資料館で保管している。

#### (五) 濁川獅子舞の現況と過去

##### (1) 幕開き（正月の悪魔祓い）

幕開きは小正月の十六日に悪魔払いとして集落の各家々を獅子舞でお祓いして廻るが、その家の意向によつて家の中に入らないで玄関前で舞う場合と家の中に入って舞う場合がある。前者の玄関前で舞う獅子舞を「キヤド（門）獅子」と呼んでいる。以前は石瀧や大谷地の集落まで門付けて廻つたと言ふ。

また、かつては正月に獅子宿に集まる時、講中の人たちはスルメに昆布・餅を持参し獅子頭に供物として供え、獅子を拝礼してから家々を廻つた。この時の餅を「おぶこ餅」と称し、必ず獅子頭に噛ませるものと言われ、獅子舞が終わると獅子宿で直会なほひの時、雑煮として食べたものであつたが、現在は市販の餅等を保存会で購入して供えている。

①獅子舞の仕度（扮装）…獅子の舞手は頭に襷たすきを巻き、単衣柄襦袢じゆばんの上衣と柄袴はかまの下衣を着、白足袋に草履ぞうりの衣裳であるが、雪が深いと長靴を履いて舞

うこともある。

獅子舞の芸態…獅子の舞手は左手で獅子頭の心棒を持ち、右手で下顎の紐を持って獅子頭を操り、幕を右肩に掛け、残りの幕の部分は後方にいる幕採りが持つて二人で舞う。囃子に合わせ身体の前で獅子頭を高く差し上げ、左右に大きく振つてから太鼓の拍子に合わせ、獅子頭を上下させながら獅子の歯打ちを打楽器のように激しく打ち鳴らす。その後、獅子頭を上方へ伸び上げるようにして歯打ちを激しく打ち鳴らす。最後は獅子頭を左から右へゆつくり振つて獅子頭を高く差し上げ、拝礼をして終わる。

②小路渡り…濁川では小路渡りを「コジヨワタリ」と称しており、各家々を廻る時、あるいは会場に向かう時の道中囃子はやしのことを言い、通常は謡を伴つて練り歩く。獅子頭を舞手が持つて先頭で歩き、その後に幕採りが続き、笛（獅子笛とも称した）・手平鉦、そして太鼓が最後になる。

##### (2) 木境大物忌神社の虫除け祭り

虫除け祭りは木境大物忌神社の宮司から案内を頂いて祭りへ行つている。毎年七月八日の八時半頃に濁川会館へ集まり、ここで獅子頭に神酒と供物を供えて拝礼し、御神酒を頂いてから獅子舞装束に整える。準備が出来ると、獅子を捧持して木境大物忌神社へ十時頃に着くように出発する。神社の御坂に来ると獅子を先頭に、囃子方は道中小路渡りの拍子を奏でながら神社へ入る。神社へ入ると獅子頭を神前に安置し、拝礼する。

十時三十分頃から木境大物忌神社の春の例祭である虫除け祭りが執り行われる。

木境大物忌神社は古代においては国家鎮守の神とされ、稲作が進むにつれ鳥海山は水分りの山であり、倉稲魂神うかのたまのみと同格の神とされ、食糧を司り、農作物の豊穰をもたらす神とされる。毎年、初夏の頃に稲の成長が盛んになるにつれ、虫も多量に発生することから、虫からの害を防ぎ、豊作を祈願する。

祭式では、杉材で作った長さ六〇cm、幅が一五cmの舟形に神官が虫封じの秘儀を行い（写真4）、虫や悪霊を舟に封じる。祭式が終わると拝殿中央を舞台として参拝者に囲まれながら濁川獅子舞講中によって舞が奉納される。

①舞の仕度（扮装）：舞手と囃子手は共に白手拭いで前結びの鉢巻きをする。獅子振りの衣裳は別当衣裳とも称され、白単衣と白袴を着、白足袋を履いて赤や薄黄色の襪をする。腰には獅子刀を差し、扇を背中に入れる。幕採りは舞手用の単衣に袴を着、黒足袋を履いて赤襪をする。囃子方は単衣に講中半纏はんてんを重ね、黒足袋を履いて演奏する。

②上演演目（上演順序・演目構成等）：獅子振り・手・扇・剣・襪の所作による神舞と幣束を収める所作の奉納獅子の二演目を演じる。

○神舞

①獅子振り：獅子が舞う場を清める露払いの舞で神前から獅子頭を捧持して拝殿に移り、神前に向かって舞われる。右に舞手、左に獅子頭を持った幕採りが立つ。笛の音で拝礼し、舞手が幕採りから獅子頭を受け取り、獅子頭の心棒を左手で持つ。幕採りは後方に回って幕を左右に広げ、舞手が動きやすいようにする。獅子振りは獅子頭を被らないで獅子頭を高く掲げ、四方固めをしながら舞うのが基本動作とされ、五拍子のテンポの速い舞である。「獅子振りのうた」が始まると左上方から囃子に合わせて獅子頭を振り中央の上方に移動して、後方の幕採りと共に拝礼し、右回りに獅子頭を振りながら一回半回って正面で獅子頭を持ち上げ、振り落とすように前方の下に下げながら右膝を折って左膝を立て右上から左下、さらに左上から右下と二回交差さ



写真4 木境大物忌神社の虫封じの儀  
(撮影：矢島教育学習課 1999年7月8日)

せる。次に正面で激しく獅子頭を上下させながら下顎と上顎を歯打ちし、さらに左と右でも同じ動作を繰り返す。終わると立ち上がり、また飛び上がるように獅子頭を高く掲げ、振り下げて右膝を立てて正面・左右と同じ動作を繰り返して四方固めをする。終わると立ち上がり、足を交互に動かしながら獅子頭を高い位置に持っていく、激しく振る。

一連の舞を終えると、獅子頭を舞手の方に向け拝礼し、また斜め左右にも拝礼して、前方はるか遠くを拝む所作をしながら「獅子振り」を終える。

幕採りは獅子頭を座って受け取ると、舞手は獅子頭の髪を整え、獅子の顔の半分くらいを髪で覆い、背中に入れていた扇を取り出して開き、獅子頭の口にくわえさせる。

②素手の舞（素舞）（写真5）：「素手の舞のうた」がうたわれると、舞手は立って素手で舞う。途中足で梵字を書く所作もあり、回りながら両手を大きく振って激しい動作で舞い、両手で神に捧げる仕草で終わる。立ち膝のまま一休みをする。

③扇の舞（写真6）：「扇の舞のうた」が始まるとともに左膝立ちの姿で獅子頭がくわえていた扇を右手に持って舞いながら立ち上がり、扇を左右の手に持ち替え、回って上に掲げ、扇を裏表にしながら舞う。

舞が終わると扇を畳んで拝礼し、次の舞への準備をする。

④剣の舞（写真7）：囃子とともに、「剣



写真5 素舞



写真6 扇の舞



の舞のうた」が始まると最初に素手で舞って腰に差していた刀を手に取り、鞘さやのまま舞ってから右手で刀を抜き、左手に鞘さやを持ち、前後左右に回すなど激しい動作をしながら刀をグルグル回し、悪魔祓いの示威を見せるように迫力ある舞を展開する。この舞の中でも足で梵字を書く所作がある。終わりには、刀と鞘に拝礼するようにして刀を鞘に収めて終わる。

⑤ 禊しづの舞：次に舞うのが「禊の舞」で、うたが始まると禊を取って両端を持ち前後左右に振って舞う。この舞は修験者である舞手が修行で鍛えた素晴らしい身のこなしを表現したものとわれ、最後に両手で持った短い禊の上を身体を縮めて縄跳びのように飛び越えて舞を終える。

### ○ 奉納獅子

獅子舞の芸態：神舞に続いて舞われるのが、「奉納獅子」である（写真8）。舞手は左手に獅子頭を、右手に幕の端を持ち、囃子が始まると拝礼し、両手を少し揺らしながら舞いのタイミングを図る。最初は低い位置から左手に持っている獅子頭を高く突き上げ、左右に振りながら幕をくぐる所作を何度も繰り返した後、両手で獅子頭を持ち、拝礼する。さらに両手で持っている獅子頭を細かく揺らしながら幕をくぐる所作を繰り返して幕をかぶる。この時、後方の幕採りは両手を広げて高く掲げ、獅子の存在を大きく見せるようにする。獅子頭は幕の中で左右に頭を激しく振つ



写真7 剣の舞



写真8 奉納獅子

て歯打ちを繰り返し、低いところから上に持ち上げ、舞手の頭上に獅子頭を高くかざして歯打ちをする。さらに左足を上げて獅子頭を振りながら低い位置へ戻し、再度高くかざして歯打ちする所作を何度か繰り返す。

この所作は、獅子の子せんしんが千尋の谷に投げ落とされ、そこから這い上がってくるたぐま遅い様子を表現したものとと言われる。次に、舞台の中を回りながら幕採りは舞手の身体に獅子幕をくぐるくと巻き付けながら獅子頭を天井を突くかのように高く掲げる。この所作を「なより」と称し、謡が入る。この所作は立ち上がった獅子の姿を神の依り代とする御幣に見立て、荒魂が鎮まっていく様とも伝えられる。巻き付けられた獅子幕は元に戻され、太鼓の音に合わせて、獅子の髪も振り乱れながら歯打ちが繰り返される。終わりは次第にゆつくりとなったテンポに合わせて、獅子頭を正面に向けて歯打ちをして舞は終わる。

木境大物忌神社で神舞・奉納獅子が終わると、濁川獅子舞講中は近くの開山神社へ向かい、神社へ拝礼した後、神社の境内で木境大物忌神社と同様の神舞と奉納獅子を演じる（写真9）。

開山神社への獅子舞奉納が終わると直ちに木境大物忌神社へ戻り、舟送りに立ち会う。小路渡りの囃子を奏で、悪魔祓いの謡をうたい、獅子頭の歯を噛み合わせながら舟を見送る。



写真9 開山神社での獅子

その後、獅子舞講中は大物忌神社で氏子役員たちと直会し、二時過ぎに帰り、会館で太鼓の上に獅子を安置し、拝礼して再度直会をする。

虫封じの舟形は小坂戸集落の当番が背負い、針ヶ岡の獅子と神官に見送られながら子吉川に流される。



(3)お盆の悪魔祓い

八月十三日の午後四時頃に集落の会館に集合し、衣裳を整えて集落の高台にある山之神社に向かい、神社の中で神舞・奉納獅子を演じる。近くに金比羅・須賀神社前、さらに庚申碑前でも奉納獅子を舞ってから最初に初棚を迎えた家に向かう。初棚を迎えた家では、夕方になると今か今かと講中が訪れて来るのを待っている。初棚を迎えた家に到着すると獅子頭を盆棚の前に安置し(写真10)、囃子は片隅に太鼓・笛・鉦の順に座る。その家の家族等と挨拶が終わると、獅子振り・素舞・扇の舞・剣の舞・擲の舞と続く神舞と奉納獅子が舞われ、最後に祓い獅子が演じられる。祓い獅子は悪霊を祓う舞で、囃子に合わせて獅子頭を激しく振って舞い、舞が終わると参列者の頭上を獅子の口で囓むようにして悪霊を飲み込み、外へ吐き出す所作を二回繰り返してお祓いをする。

その後、太鼓の拍子に合わせて獅子が歯打ちをして舞っていく。この所作を「ヤツ食いの舞」とも称され、謡が入る。太鼓の拍子が次第に速くなるに連れ、歯打ちのテンポも速くなり、獅子頭も激しく左右前後に振って舞い、観客を引き込んでいく。終わりには身体の前で獅子頭を左右前後に振りながら静かに舞を終わり、獅子頭をかざして礼拝をする。

舞が終わると家族・親族等が頭上にそれ



写真10 初棚に拝礼する講中



写真11 獅子が厄を祓う

ぞれ初穂を掲げて獅子が来るのを待っている。座敷の隅に座っている親族等の一人一人に獅子が頭を囓むようにして祓い(写真11)、その後初穂を獅子が口でくわえて収めていく。初棚の前にお膳に供えられた米は持参した白袋に入れるが、米はお膳に少し残しておく。この米を翌朝混ぜて炊くと身体堅固となり長生きするとされる。

獅子舞が終わると直会が準備され、初棚を迎えた家では皿盛りや枝豆を用意して酒やビールで講中を歓待し、死者の盆供養を終えた感謝の意を示す。

この後、集落の各家々と柴倉集落の一軒を回り、祓い獅子を舞って終わると直会を受けるが、初棚以外の家では枝豆・スイカ・ビール等の簡単な接待で終わる。

最後は車を運転して酒を飲まなかった会員もおり、集落の会館で締めめの獅子舞を舞い、獅子頭を安置して悪魔払いの行事を終える。

(4)矢島神明社の八朔祭り(幕納め)

八朔祭りは九月の第二土曜・日曜日を実施している矢島神明社の祭礼で、かつては旧暦の八月朔日に行われていた。神明社は明治六年(一八七三)に郷社に列し、祭神は稲をつかさどる倉稲魂うらのみたまを祀り、豊穣と人々の安全を祈願する祭りであることから、地域の人々から厚く信仰されている。氏は生駒藩陣屋の下にある城内と称されている六丁の地域で、この中の四丁が祭りの統前丁を交代で担っている。

濁川獅子舞が八朔祭りに関わるようになったのは、平成十年からと祭典記録に記されており、比較的新しい。それ以前は、記録によると明治二十九年から大正二年までは御用一番獅子と言われた獅子頭を持つ荒沢獅子舞番楽であったが、その後、坂之下獅子舞番楽が担ってきた。

八朔祭りの前日の夜には、濁川獅子舞は正月や盆の悪魔払いと同じように氏子町内を「キヤド(門)獅子」をして廻る。

この時に各家々から初穂が呈上される。さらに、宵宮祭の日には濁川の会館を午後後に発ち、祭式が始まる前まで前日と同じようにキヤド獅子をして丁内を廻り、宵宮祭の時刻に合わせて獅子振りを先頭に囃子連中が列をなして神社へ向かう。神社すぐ下の御神社坂にさしかかるとコジョ（小路）渡りの囃子と謡をうたいながら勢いよく神社拜殿へ上がり、拝礼をする。拜殿の中では囃子を止め、太鼓を立てた上に獅子頭を安置する。講中の座席は当番・氏子代表の人々の脇や後方で、獅子舞の準備をしながら待つ。

宵宮は、修祓・祝詞奉上の順に進み、次に奉納舞楽となる。最初に巫女神楽舞が舞われ、いよいよ濁川獅子舞の番となる。拜殿中央に獅子振りと幕採りが歩み、神前に向かって舞を奉納する。最初は神舞で、素舞・扇の舞・剣の舞・襷の舞が繰り広げられ、太鼓の囃子手が舞に応じて、それぞれの謡をうたう。この間、幕採りが獅子を捧持している。神舞が終わると、幕採りから獅子頭を受け取り、後ろで幕採りは獅子幕を持ち上げ、神殿に向かつて奉納獅子を演じる（写真12）。

この後に神楽太鼓が奉納され、それが終わると、お下りという御神輿渡御に加わる。濁川獅子舞は行列の中では前から十番目の位置で、神官・巫女・祭主奉幣持の後に就き、その後には御紋付灯笼・真榊・白御旗と続く。真夜中の提灯の揺れる中を御神輿



写真12 矢島神明社の八朔祭(獅子舞奉納)



写真13 矢島神明社の八朔祭(御神輿巡行)

が神宿へと向かって巡行する。

翌日の祭日には氏子である六丁内を御神輿行列が巡行する（写真13）。濁川獅子舞は白御旗・巫女・祭主奉幣持に続き十一番目の位置で、その後には赤御旗・真榊・副祭主と続く。いずれも御神輿よりも前の位置であるが、行列が遅くなったり、行列から離れてしまわないように気を付け、御神輿行列の中で獅子舞を舞うことはなく、神明社へ巡行して帰る。

なお、御神輿行列とは別に毎年趣向を凝らした山車と踊りが六丁から繰り出して披露され、城下の六丁内を廻って祭りの賑わいと華やかさを一層盛り立てている。

この矢島神明社の八朔祭りが濁川獅子舞講中の幕納めとなっている。

(5) 柱がらみ

毎年定期的には行われていないが、新築の家などから依頼があると、「柱がらみ」という火伏せの祈祷獅子がある。獅子舞を舞う前に大黒柱に紅白の幕を巻き付けておき、この幕を噛み、柱にからみながら舞う獅子舞である。

(六) 言立と囃子手

濁川獅子舞には囃子手として笛・太鼓・手平鉦があり、獅子舞の囃子を演じるには最少人数で三人が必要なメンバーである（図1）。

言立は太鼓の囃子手がうたい、掛け歌も舞手や太鼓の囃子手がうたった。言立の中には耳から聞いた言葉を書き記した資料もあり、全ての資料が同様ではない。『わが町の獅子神楽』（矢島町教育委員会、二〇〇四年）に拠ると濁川獅子舞では、演目ごとに次のようにうた

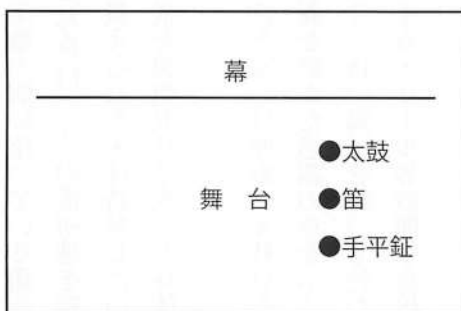


図1 舞台図

われている。

①小路渡り

へアーラ 此所はどこ 長門の庭の屋 立つどころ 世界は広く

国は穏やか 心穏やか ヤーアー

へアーラ おん鳥海の 嶺に登りし 国見れば 世界は広く

国は穏やか 心穏やか ヤーアー

へアーラ 打てば鳴る 打たねば鳴らぬや この鼓

川の鳴る瀬か、心鳴る瀬か ヤーアー

②神舞のうた

(ア)獅子振り

へ伊勢の国 高まの原にや 神遊ぶ

うたえば開く 天の岩戸 天の岩戸 ヤー

(イ)素手の舞(素舞)のうた

へアーラ 此所はどこ 長門の庭の屋 立つどころ

千代振る神や 鳥は舞い鳥 鳥は舞い鳥

(ウ)扇の舞のうた

へアーラ 扇を採り 扇を採りそめ 扇を採る 扇を採りそめ ヤーアー

(エ)剣の舞のうた

へアーラ 毘沙門の 左脇差し 抜いて見れば 煌々の光

(オ)襷の舞のうた

へアーラ 十七 十八 赤い襷を 誰も持つ 誰も持つ

そめわかのため ヤーアー

③祓い獅子のうた

へアーラ 祓い戸の どなたあなたと 呼ぶ声は 道者の声

道者の声 ヤーアー

④奉納獅子「なより」のうた

へアーラ ナヨリ ナヨリとこの松は ただひるナヨリ

御幣なるものヤー

ソイ ナヨリとこの松は やや面白や 御幣なるもの

御幣なるものヤー

(七)演目

現在、濁川獅子舞で演じている演目は、木境大物忌神社の虫除け祭りと矢島神明社の八朔祭りで演じている獅子振り・素舞・扇の舞・剣の舞・襷の舞から構成される神舞と幣束を収める所作の奉納獅子の二演目、そして正月とお盆に演じる悪魔祓いの祓い獅子のみである。このほかに、新築時に依頼があれば柱がらみも演じている。

ところで、濁川獅子舞の演目は火事の際焼けずに残っていた「獅子舞根本記」に記されており(写真14)、末尾には「維持、元治甲子星(一八六四) 仲秋日 写書之」と記されている古い資料である。このほかに、この「獅子舞根本記」を書き写した資料がもう一冊あり、末尾には「維持、明治十五年(一八八二) 午十月下旬 村上信治 写之」と記されている。いずれも矢島郷土資料館に保管されており、獅子舞根本記の中には次の二十四演目が書かれている。

- ① 一番楽(根本記では、「南風シニ 北時雨」とある。)
- ② 鳥舞
- ③ 翁
- ④ 三番神
- ⑤ 念事
- ⑥ 扇子的
- ⑦ キサラギ
- ⑧ 一人晩楽
- ⑨ 地神舞
- ⑩ 曆舞
- ⑪ 船辨慶
- ⑫ 曾我
- ⑬ 山神舞
- ⑭ 潮汲ミ
- ⑮ 三人立
- ⑯ 女舞(蕨折)
- ⑰ 切合
- ⑱ 木曾
- ⑲ 今田八郎
- ⑳ 鐘巻
- ㉑ 機織り
- ㉒ 信夫
- ㉓ 岩戸開
- ㉔ 桜子



写真14 「獅子舞根本記」に記す言立

『わが町の獅子神楽』によると、これらは本海行人が直伝したと伝えられる荒沢獅子舞の言立本と演目は、ほぼ同じであるが、濁川獅子舞が⑩曆舞・⑮三人立・⑰切合の三演目多いとされる。

しかし、坂之下番楽と比較すると大きく異なっており、坂之下獅子舞番楽の一九演目中、②鳥舞・③翁・④三番神・⑥扇子的(那須与一)・⑨地神舞・⑬山神舞(山之神舞)・⑮三人立(三人太刀)・⑯女舞(蔵折)・⑱木曾・⑲今田八郎の一〇演目が濁川と同じで、残り九演目の①四季・②五拍子・③ソックス・④餅搗・⑤スズカ舞・⑥小弓舞・⑦可笑・⑧唐白舞・⑨伊賀は濁川獅子舞にはない演目とされる。

ところで、濁川獅子舞の言立本にあった二四の演目が、どのような伝承経緯をたどったかは定かではないが、昭和五十四年(一九七九)の八ミリフィルムによる記録では、①小路わたり・②神舞・③先番楽・④太郎舞・⑤三番神・⑥鳥舞・⑦三人餅搗の七演目が記録されており、この中の太郎舞が②信夫に当たると思われる。この後の昭和五十八年に今野銀一郎氏等によって調査された記録では舞台番楽として、①先番楽・②鳥舞・③翁・④三番叟・⑤那須与一(扇子的)・⑥岩戸開き・⑦地神舞・⑧信夫・⑨曾我五郎十郎・⑩山之神・⑪小弓舞・⑫蔵折・⑬道化舞が記されていることから、この時点でも一三演目は演じることができたのではないかと推測される。

#### (八) 獅子の信仰と形態(祓い獅子・奉納獅子・柱がらみ・虫追い等)

濁川獅子舞は、どの行事でも獅子舞で始まり、獅子舞で終わっている。正月とお盆の悪魔祓いの祓い獅子、矢島地域において重要な行事である鳥海山大物忌神社の虫除け祭りと矢島神明社の八朔祭りでは奉納獅子、このほか新築した家から依頼があると柱がらみなどの獅子舞を演じて火伏せや家内安全を祈願している。

獅子頭には神が宿ると言われ、集落の会館で保管される以前は講中で一年

ごとに交代して獅子宿となり、獅子宿の家では一日も欠くことなく水を取り替え、御獅子様に拝礼してきたと言う。

鳥海山大物忌神社の虫除け祭りの奉納獅子は、かつては荒沢が担っていたが、やむなく廃止となり、その後には坂之下獅子舞が担った。しかし、その坂之下獅子舞も困難となり平成十年からは濁川獅子舞が担って現在に至っている。

濁川集落は木境大物忌神社に最も近いところであり、しかも鳥海山へ登る時の参道があり、修験者の修行場所でもあった。また、本海番楽の師であった本海行人が近くの荒沢集落に晩年住み、没した地であることを考えると、他の講中よりも鳥海山に対する信仰や獅子への畏敬の念を古くから持つて来たように思われる。

それらのことが、最も身近で顕著に見られるのが、お盆の悪魔祓いであり、初棚を迎える家の人々の対応ではなからうか。

お盆に獅子舞が来なければ、お盆ではないとの強い思いが集落の人々にあり、夕方講中が訪れて来るのを家族や親族で待っている。初棚においては、獅子舞の悪魔祓いによって亡き人の霊を無事に迎えることが出来ると共に、現世で生きる家族・親族一同も安全に生活を送ることが出来るという民俗宗教的な信仰が継続して保持されているように思われる。このような思いは正月を迎える時も同じようであり、獅子舞が地域の中に溶け込み根付いている。それは、獅子が悪霊を祓う霊力を持っていると言う畏敬の念と共に、祓い獅子や奉納獅子の舞が、太鼓の拍子が次第に速くなるにつれ、獅子の歯打ちも同調して速くなり、回りで見ている人が、そのリズム感と一体となり、それら演技が人の魂を高揚させて人々の記憶の中に刻み込まれているからではなからうか。

舞が終わると家族や親族は、それぞれの初穂を頭上に掲げ、獅子頭に厄を祓ってもらい、感謝の初穂を獅子の口でくわえさせることや、その後には初棚



を迎えた家族や親族が皿盛りや酒・ビールで講中を歓待する直会にも、獅子舞に対する畏敬の念と感謝の表れであり、他の地域では余り見ることのない光景である。獅子に寄せる人々の長い間の厚い信仰心と小さな集落の人々の強い繋がりをうかがい知ることができる。

また、旧矢島町の二大祭礼と言ってもよい木境大物忌神社の虫除け祭りと矢島神明社の八朔祭りに加わっていることに対し、誇りと責任感を講中は持っているものの、現在最小人数の会員であり、現在のまま、これまでの行事を継続していけるかどうか不安感と危機感も持っている。今後も濁川獅子舞を集落全体でできるだけ長く伝承していきたいと望んでいる。

(九) 獅子頭・番楽面・道具類

(1) 獅子頭

現在使用されている獅子頭は大正十年代(一九二二)に造られたと伝えられ、村の入口にある顕彰碑の高橋長吉翁の息子である長治郎が彫り、塗りは田中町の加納熊平が仕上げたと伝えられている。獅子頭は「御獅子様」と呼ばれ、材質はウマダ(科の木)とされ、頭部連結型で頭頂部には宝珠があり、獅子頭の大きさは、横一七cm、高さ二七cm、奥行きが二七cmで、頭部の髪の毛の長さは八五cmの赤・ピンク・黄・青・水色など鮮やかな色彩の布が多数用いられている。歯は大きく目が長方形で鋭い(写真15)。

獅子の胴幕は通常「マク」と呼ばれ、唐獅子模様である。大きさは、長さ一・九m、幅一・八mほどで、獅子の尾の長さは一・三m、幅六〇cmほどで、胴幕には「昭和五十年九月吉日 新調」と染められている。

このほかに、隠居獅子が残されている。大

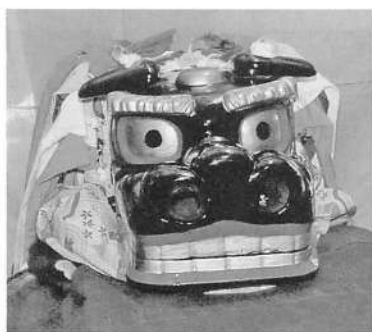


写真15 獅子頭

きさは現在使用されている獅子頭とほぼ同様で、現在の獅子より全体的に部厚な感がある。隠居獅子の下顎と同様の下顎も近年発見されている。

(2) 番楽面(写真16・17)

檜と桐で出来た餅搗道化面が二面あって、共に縦一九cm、横一四cmの大きさである。また、念事面・太郎面・武士面の三面は、裏に「宇山」と彫られ、花押も彫り込まれており、明治三十年代に京都から購入したと伝えられている。このほかに、鍋えがけ面・三番神面・キサラギ面・女面(大と小)・木曾面・熊襲面・翁面・義経面(二面)・弁慶面などがある。

平成十四年に番楽面類・道具・楽器類・衣服類・番楽幕などが盗難にあつて、その後、主な面類は矢島郷土資料館で保管している。

(3) 番楽幕

番楽幕は番楽を演じる時に部屋や舞台の中央に吊り下げられ、舞手は持ち上げられた幕の中央から出てきて、終わりには再び持ち上げられた幕の中央

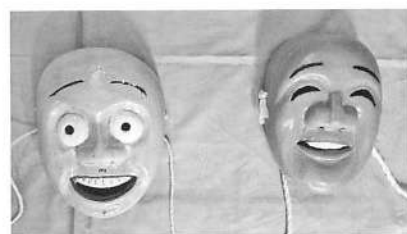


写真16 餅搗道化面



写真17 上段左より:女面・鍋えがけ面・太郎面、下段左より:女面・木曾面・武士

から入っていくと言う表舞台と控え所との境界的な役割を持つている。

濁川の番楽幕は「橘の紋」が三方所にあり、左に三番叟、中央に武士、右に翁の舞う図、下に植物の花や草を配し、左端には「明治十三年七月日 濁川」と染め抜いた立派な番楽幕であったが、平成十四年に盗難にあった。

それ以前の幕も保存されてはいるが、一部虫食い状態となっている。

現在は平成九年十一月に新たに作った番楽幕があり、幕の中心に三つ橘の家紋を配し、その左下に三番叟、中央に柱がらみ、右下にキサラギの舞の図を入れ、上部には龍の図を配した綿製の吊り手状の幕である。幕の大きさは横六一〇cm、高さ二四二cmの大きさである（写真18）。



写真18 番楽幕

(4)衣 裳

獅子の舞手の衣裳は悪魔祓い獅子と奉納獅子の衣裳は異なり、悪魔祓いの時は単衣柄襦袢と柄袴を着、赤い襷を掛ける。下は白足袋と草履であるが、最近はずック姿も多い。奉納獅子の場合は白着物に白袴と白足袋を履き（写真19）、白鉢巻きを前結びにして赤い襷をかけ、獅子刀を差して扇を持つ。幕採りは単衣浴衣に柄の袴を着、黒足袋を履いて赤い襷を掛ける。

神舞の衣裳は羽織・袴とともに足袋・前結びの鉢巻きも白装束である。囃子手は単衣浴衣に、背中が龍の図柄で衿に「濁川獅子舞」と染めた保存会の半纏を重ね、白鉢巻きを前結びにし、黒足袋を履く（写

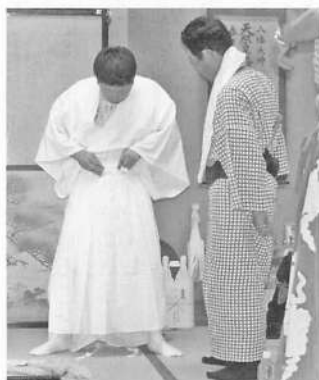


写真19 奉納獅子舞の衣裳準備



写真20 上：半纏 中央：袖付着物 下：襷

真20) このほかに、濁川獅子舞では現在舞われていないが、演目ごとの衣裳については『わが町の獅子神楽』に次のように記されている。

①先晩楽 二人 袖付着物(襦袢)・袴・烏帽子・白鉢巻き・襷・黒足袋・

扇

②鳥 舞 二人 雌雄鳥 烏帽子(烏兜)・袖付着物・襷・白鉢巻き・扇

③三番神 一人 烏帽子・三番着物・羽織・袴・白鉢巻き・黒足袋・三番神

面・扇

④那須与市 一人 兜・鎧・武士面・ゴザ袴・扇

⑤岩戸開 二人 袖付着物・袴・襷

⑥地神舞 二人 袖付着物

⑦小弓舞 二人 単衣(浴衣)・白足袋・鎧・シヤグマ・弓

⑧蕨 折 三人 女：女着物・白足袋・女面・頭隠し

ソツソク：赤襦袢・股引・襷・黒足袋・ソツソク面

翁：狩衣・ゴザ袴・シヤグマ・翁面・紙こより

⑨道化舞 一人餅搦 赤襦袢・色股引・襷・黒足袋・面・白布

太郎舞 赤襦袢・色股引・襷・黒足袋・面・手拭い

三人餅搦 赤襦袢・色股引・襷・黒足袋・頭巾・扇・餅・搦き棒・

このほかに、古い半纏や個人持ちの衣裳もあるり、年一回会館で虫干しをしている。

白布

(5) 楽器類

① 太鼓：太鼓は大正時代の古いものと平成二十四年に補修した二つの太鼓がある。現在使用している太鼓は縦横直径四六cm、高さも四六cmの大きさに紐がついて肩から吊り下げられるようになっていて（写真21）。



写真21 太鼓

② 笛：竹で作られ、長さが四三・七cm、直径が口を当てるところが二cmで下部に沿ってやや細くなり下部は五cmの大きさである（写真22）。

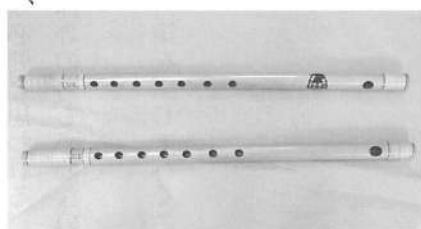


写真22 笛

保存会には六本程あるが、個人で所有しているものもある。笛吹きが廃れると舞も消滅するとまで言われ、笛は囃子の中でも最も重要と言われる。

③ 手平鉦：銅製であるが、中には鉄で作られている鉦もある。直径一二cmの大きさである（写真23）。現在、数組保管されている。

(6) 道具類

表に大きく「獅子舞道具入」と記され、その右脇には「明治四十二年旧七月」と書かれた木箱があり、主な道具類はその箱の中に保管されてきた。

① 錫杖：全長二六cm、把手の長さが一八cmで、上部には金属で出来た輪が四つ取り付けられている。これよ



写真23 手平鉦

りも比較的小さな錫杖もあり、合わせて二本ある。

② 扇：舞の扇は大正時代に土田誠一氏から二本寄贈されているものがあり、共に縦三三cm、横が五六cmの比較的大きな扇である。



写真24 赤鎧

③ 剣：全体の長さが六四cmで、鞘の長さが四六・五cmあり、幅が四cmあり、刃の長さが四四cm、最大幅が三・五cmの大きさである。

④ 鎧：資料館には色鮮やかな赤鎧（写真24）と黒鎧の二組が保存されている。大きさは縦が約六五cm、幅が約五四cm程である。このほかに、会館にも古い鎧が二組残されている。

⑤ その他：このほかに、烏甲・赤と黒の鎧・頭隠し・烏帽子（写真25）・シャグマ・まさかり・餅搗き棒などがある。

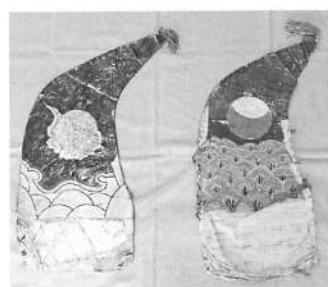


写真25 烏帽子

(十) 伝承状況と今後の課題

数年ほど前に保存会の二人が亡くなり、四人となってしまった。獅子舞を演じていくには最低五人の会員が必要と言われ、その後継者として高橋会長の孫等が会員となって、現在は各行事で神舞等を演じることができ、辛うじて保存会を運営している。

このように、かつては二三演目ほど演じていた番楽等も現在は神舞と奉納獅子舞の二演目のみ（依頼があれば柱がらみも可能）である。休止となっている演目の復活は、会員が増加しなければ困難と思われるが、濁川集落は

一戸という小さな集落で少子化と高齢化も進んでいることから会員の増加は望めず、演目の復活もかなり難しいと思われる。

しかし、矢島地域の二つの重要な例祭である木境大物忌神社の虫除け祭り  
と矢島神明社の八朔祭りで獅子舞を演じている。鳥海山信仰と本海番楽に古  
くから縁があり、地理的・歴史的な観点や鳥海山信仰から考えると旧荒沢村  
の地域の中で担っていくことが、非常に意味あることと思われる。

したがって、今後濁川獅子舞保存会へ会員が加入しないままに、会員が高  
齢化し、休止という結果を迎える前に旧荒沢村の各集落等が集まり、今後の  
対応等について話し合いをしていく機会を設けることが必要と思われる。あ  
るいは、矢島地域全体の課題として行政や芸術文化団体等の力も必要なの  
かも知れない。

いずれにしろ、獅子舞の伝承と番楽の復活に向けた方策を講じて行くこと  
が、今後必要と思われる。

### (十一) 濁川獅子舞番楽資料

#### ① 文書・記録類

「獅子舞根本記」 元治元年写・明治十五年写

#### ② 映像記録

ビデオ「木境大物忌神社虫除け祭り」 矢島町教育委員会、一九九九年

ビデオ「濁川番楽」 矢島町教育委員会、二〇〇三年

DVD「由利本荘市 民俗芸能と祭り」 由利本荘市教育委員会・商工観光  
部、二〇一五年

#### (註)

(一) 『わが町の獅子神楽』 矢島町教育委員会、二〇〇四年。

#### (参考文献)

竹内理三編『角川日本地名大辞典 5 秋田県』角川書店、一九八〇年。

下中邦彦編『秋田県の地名 日本歴史地名体系 第5巻』平凡社、一九八〇年。

『秋田県の民俗芸能―秋田県民俗芸能緊急調査報告書―』秋田県教育委員会、一九九三年。

『木境大物忌神社の虫除け祭り』 矢島町教育委員会、一九九九年。

『秋田県矢島の神明社八朔祭』 「矢島の神明社八朔祭」 記録作成委員会編、二〇〇一年。

高山茂「鳥海山麓の本海流獅子舞と獅子信仰」 『季刊 東北学』 第十二号、東北芸術工科大学東

北文化研究センター、二〇〇七年。

齊藤壽胤監修『民俗芸能と祭りガイドブック』 由利本荘市鳥海山 de 元気実行委員会、二〇一五年。

菊地和博「秋田県由利本荘市の本海番楽調査」 『東北の民俗芸能と祭礼行事』、清文堂出版、二

〇一七年。

齊藤壽胤・高橋正『鳥海山をめぐる宗教文化』 由利本荘市教育委員会、二〇一〇年。

(須田 高)